

この劇は、追憶の世界である。ただし、この劇にあっては、追憶はマンガと同義語である。追憶もマンガも同じように現実的ではないから、というのではない。ここでいう追憶とは、現実の意識にともなっていない。いつも新しく生まれかわるようなものであり、それは肌身離さず持ち歩けるポケット・サイズのファンタズムなのである。

あるいは、この劇は、ボール紙を切りだしたような町なみの向こうに太陽が落ち、しかしまだ電信柱の裸電球に灯はともらず、薔薇色の西空の下で、三角ベースのゴムまりも、豆腐屋のラップも、郵便ポストも、走りすぎる自転車オートバイの後ろ姿も、みんな一様に限界を喪失し、バラバラな破片になり、互いに浸透しあう存在となって、無辺際の彼方の星雲にまで届く力線を放射している、そんなつかのまの世界である。

そんなつかのまのニジツセイキの都会の空に、ペンシルキヤップのロケットをとばしてみたい。子供はそう思った。子供はいつだってなにかをとばしてみたいと思うものだ。そして、ペンシルキヤップのロケットとは、そんな彼らにとって、生と死のたまゆらに未来を望む飛行者のための偉大な乗り物だったのである。

登場人物

ヤスベー／やさしいおじさん

ぼく(梶コージ)／ヤスベー2

もう1人のぼく／出前の女3

父(キューサク)／やさしいおじさん3

母(ヨキコ)／出前の女2／やさしいおじさん2

田手上／タテガミ／やさしいおじさん1

松島トモコ／出前の女／やさしいおじさん 4

松島トモコの父／やさしいおじさん 5

藤山教諭／田手上 2

医師／やさしいおじさん 2

看護婦

ぼくたち

生徒たち

盆踊りの踊り手たち

舞台には紗幕がおりている。

紗幕の向こう側、すなわち追憶の世界はまだ闇にせずんでいる。

紗幕前の舞台上手には電信柱が立っている。

ぼんやりと裸電球のともった電信柱には、帽子とコートと画帖が影のようにはりついている。

きつとどこかの知らないおじさんが忘れていったにちがいない。

下手には机と椅子が置かれてある。少女マンガ家ヤスベエ女史の仕事机である。そして、その机の上で、彼女はニジッセイキ最後のマンガを描くことになるのである。

次第に高鳴る一九六四年のオリンピック・マーチとともに客席が暗くなり、追憶の世界が黄泉がえる。

プロローグ

紗幕の向こう側に巨大なマンガ本が浮かび上がる。

表紙には――「現代少女マンガ全集」の文字。

ゆつくりと表紙がめくられると、なかから複数のおぼくたちが登場する。

ぼくたちは、白いピーターパン・カラーのついた学生服に野球帽をかぶった少年である。

ぼくたちには顔がない。つまり、なつかしのテレビ『透明人間』よろしくグルグルと顔中に繃帯を巻きつけているのである。

ぼくたちは、巨大なペンシルキャップ・ロケットの発射準備を開始する。すなわち、巨大な消しゴムの上に巨大な三角定規の発射台をすえつけ、巨大なパイプマッチから引き抜いた巨大なマッチ棒の頭を折り、火薬だけを巨大な鉛筆から取りはずした巨大なペンシルキャップにいくつもつめこみ、尻をつぶしてそれを発射台にセットすると、火のついた巨大なローソクをペンシルキャップの銀色の腹に炎があたるように置くわけだ。それで発射準備は完了、あとは火薬の発火するのを息を殺して待つだけである。あつちと着々と進行する発射準備の作業に、ヤスベーの声がかぶさる。

ヤスベーの声 あの日、大地は一人の犠牲者を飲みこもうと待ちかまえていました。物語の時間が主人公の若い日々とともに終わるのなら、あの日からぼくは、終わってしまった物語を何度も何度も繰り返しながら、昨日となにもかわらない今日を暮らしているのです。もしぼくがあのとときコココーラを飲んでいれば……。ぼくは、あの一本のコカコーラをいつまでも悔やみつづけることでしょう。コカコーラ殺人事件。……これは、西暦一九六四年十月十日、オリンピック日と和の青空に向けて発射されたぼくのロケットをめぐる、いわゆるひとつの物語なのです。

発射準備を完了したぼくたちによるカウント・ダウンが始まっていた。

ぼくたち……5、4、3、2、1！

舞台上のすべての時間が静止し、影となる。紗幕に巨大なコカコーラ三五〇㊦㊧㊨が映しだされる。ビー玉を溶かしてつくったのだとぼくに信じられていた、あの緑色のガラス壘である。英字のロゴのはいつた壘の腹のふくらみあたりに、マンガの題名が重なって浮かびあがる。すなわち「コカコーラ殺人事件」。

暗転。

その一 ニジッセイキの大晦日

闇のなかで声が――

声 こんばんわ！ ムジナ出版の田手上です！

紗幕前が明るくなる。そこはヤスベーの仕事部屋だ。下手の机で、ヤスベーが原稿に向かいペンをはしらせている。

上手から防寒服の重ね着で芋虫のように身体を太らせた中年の編集者、ムジナ出版の田手上が紙袋をさげて登場。

田手上 イヤー、今夜も冷えるですね。（ト、防寒服を一枚一枚剥ぎとりながら）地球の温暖化だなんだって流行語みたいに口にして騒いでる奴等いますけどね、でも私、こう思うです。地球はどんどん寒くなってるって。氷河期がそこまで来てるって。

ヤスベー（目もくれず）人類が誕生して二百万年、地球はずっと氷河時代なんだよ。

田手上 あれ!? 先生、まだ仕事してるですか？

ヤスベー これだけはやっちゃまわないと……

田手上 大晦日に原稿とりにくるバカがいるですか!?

ヤスベー そうじゃないんだけどね……

田手上 でしょ? じゃ、もうやめてソバ食いましょう、年越しソバ。

ヤスベー おなか、へってないから……

田手上 縁起もんですよ、先生。いま角のヤブに出前たのんできましたから。それからこれ(ト、紙袋からとりだしたセブンイレブンの袋を机の上にデンと置き)セブンイレブンのオセチ。

ヤスベー (顔を上げ) 田手上くん。

田手上 ?

ヤスベー (強い口調で) 邪魔だよ。

田手上 (おずおずと袋をどけ) ……先生。私、お邪魔ですか?

ヤスベー、急に笑いだす。

田手上 (ムツとして) なんかおかしいですか、先生。

ヤスベー 前にね、「少女ラビット」の編集者でナンバくんについてね、それがいつもコートの下にパジャマ着て原稿とりにくるんだ。

田手上 パジャマ?

ヤスベー それで、ぼくの机の前でパツとコート脱いで、「先生、ぼく、パジャマでお邪魔です!」って――

田手上、パツとコートを脱いだ。その下はパジャマだった。

田手上 (バツ悪そうに) ……

ヤスベー 着てたら、コート。パジャマは冷えるよ。

田手上 この方がいいんです。私、この寒さと肌で格闘するです。

だって、少女マンガはもうとつくに氷河期なんですから。ねえ先生、一体どうしてこのごろの子供はマンガ読まなくなったで

すか？

ヤスベー みんな純文学へいっちゃうからね。

田手上 子供だけじゃないです。いい歳した大学生や大人までがみーんな子供の真似して純文学に哲学書ですからね。一体どうなっちゃうんでしょう、この国は

ヤスベー さあね。(描きかけの原稿を見て) ぼくはこの子のためにマンガ描くだけだから……

田手上 この子？(ト、原稿をのぞいて) いいなあ、この狂ったデッサン。バカまるだしの顔。笑えますよ、先生。とにかく、マンガ読んでパーッと明るく笑わなくっちゃ。ねえ？ 明るいうちはまだ大丈夫、人間は滅びやしないって、先生言ってますよね。

ヤスベー ぼくじやないよ。坂口安吾が言ったんだ。

田手上 坂口安吾ってマンガも描いたですか？

ヤスベー 知らない。(ト、ふたたびペンをとる)

田手上 驚かんでくださいよ、先生。「少女ラビット」……廃刊だそうです。

ヤスベー 「少女ラビット」も!?

田手上 これで、残ったのはとうとううちだけになったです。少女マンガ……氷河期です。

ヤスベー (やさしく) ありがとう。

田手上 え？

ヤスベー それを教えにきてくれたんだね。ぼく、これやらなきやなんないから……(ト、ペンをはしらせる)

田手上 一体どこの原稿なんです？ っていったって、もううちしか残ってないんですよ。ねえ、先生。先生の原稿ならどんな原稿だって必ずぼくがうちに載せるです。だから、今夜はもうやめましょうよ。……(しみじみと) 私のイナカにはね、大晦日の「いねんこう」ってあるですよ。「いねん」っていうのは「眠らない」って意味です。昔から大晦日は一晩中寝ないで、い

ろりのまわりで茶飲み話なんかして夜をあかすです。私、今年の大晦日だけはどうしても先生と、そんなふうにご一緒したくて。だって、今夜は特別な夜じゃないですか。

ヤスベー だから！（ト、手を止め）……だからぼくは、こいつを仕上げちまいたいんだ。だって、今夜は西暦二〇〇〇年の大晦日なもの。ニジツセイキの大晦日なもの。

そこへ上手から声が1

声 こんばんわ1

田手上 ソバ屋だり!? とにかく先生、ソバ食いましょ。ソバ。ニジツセイキ最後のソバ。

ト、上手へ去る。

ヤスベー、机の上の原稿をめくり、そのなかの一枚を手にと、読む。

ヤスベー 「……ねえ、おとうさん。あしたのぼくはだれでしょう。ねえ、おかあさん。永遠の遠国はどこにあるのでしょうか。（紗幕の向こう側に、彼方を見はるかすように立ちつくす父と母と、そしてぼくの姿が浮かぶ）……この空の彼方には、緑の野と、小鳥と、そしてぼくによく似たもう1人のぼくが住んでいて、きっといつか二人はめぐりあう。そんないたいけな予感に、体のふしぶしが融けてしまいそうになるのを必死でこらえながら、ぼくは父と母の手を握っていたのです。……オリンピックまであと100日。夏はもう始まっていました。――」

授業の始まりを告げる鐘とともに、ぼくの背後に一九六四年のぼくの教室が浮かび上がる。

ヤスベーは机に向かいペンをはしらせる。

その二 われ思う、夢にわれあり。

夏休みも間近な教室では国語の授業中だ。

中央奥に担任の藤山教諭が黒板を背に立っている。

黒板には「今月の目標 忘れものをしない」の貼り紙。

黒板をはさんで「ハ」の字にからだ机に向かい、教科書を開いた生徒たち。

ぼくはなおも立ちつくしている。立つたまま眠っているのかもしれない。

生徒の一人が立ち、教科書を読んでいる。その声がぼくには夢のようにきこえる。

生徒1 「……太郎は、少年と友だちになって、自分は少年から金の輪を一つ分けてもらって、往來の上を二人でどこまでも走ってゆく夢を見ました。そして、いつしか二人は、赤い夕焼け空の中に入ってしまった夢を見ました。明くる日から、太郎はまた熱が出ました。そして、二、三日目に七つで亡くなりました」
(座る)

藤山教諭 はい、そこまでやね。……エー、体が弱く、そのためいつもひとりぼっち、友達のなかった太郎は、金の輪をまわす少年に出会いました。そして、そのたったひとりの仲間と一緒に、金の輪をまわしながら、あの世へと——(教室の後ろに立ちつくすぼくに気づき)だれや、そこ立っとんの。授業中に勝手に立ったらいけません。(ト、近寄り)ん？ きみ、どこのクラスや？

ぼく (ハッと目をさまし) ども。

藤山教諭 (呼んで) 学級委員。タテガミ。

上手から、野球のユニフォーム姿の少年タテガミがハンカチで手をふきながら登場。ムジナ出版の田手上に実によく似ている。

タテガミ イヤー、ウンコの切れが悪くって……

藤山教諭 だれや、この子。

タテガミ では、ご指名にあずかりまして、わたくしタテガミからご紹介いたします。うちのクラスの梶コージです。

藤山教諭 (お辞儀して) 担任の藤山です——って、知つとるわ、そんなもん。梶コージくんやんか。(ぼくに)なあ? 先生、ちよつとド忘れしたんや。で、梶君、きみ、そんなとこでなにしてんねん。

ぼく いやあ、えへへ……。

藤山教諭 言わなわかれへんで。

タテガミ 先生。梶は教科書忘れたんです。

藤山教諭 知つとるわ、そんなもん。今月の目標は「忘れものをしてない」。そうやったね、梶君。ところがきみは国語の教科書を忘れた。だから、先生が立たしたんや。

タテガミ 先生。梶の忘れたのは理科の教科書です。

藤山教諭 先生メチャメチャ悲しい。そやろタテガミ。ええ? 先生いまなんの授業しとった?

タテガミ 国語です。

藤山教諭 そおや。理科は一時間目や。——エエ!? (ト、驚いて「ぼく」を見て) だつてきみ、いまもう五時間目やで。

ぼく ……

藤山教諭 じゃあきみ、朝からずっとそこ立っとなんか!? まるで透明人間やな。なんでや。なんできみ、だまって立っとなんや。

ぼく 先生に言われたから。

藤山教諭 きみは先生の家来か? きみは先生に言われたら力道山

と結婚するんか？

ぼく しません。

藤山教諭 長島選手のオシッコ飲むんか？

ぼく 飲みません。

藤山教諭 そやろ。

ぼく おじさんなら別だけど。なんてね。

藤山教諭 (ムツとして) だれがおじさんや。

ぼく やさしいおじさんて、ぼくの家来なんです。へへ。

藤山教諭 きみ、先生のこと、怒ってるのんか？

ぼく だいじよぶ。おじさんにいつけたりしないから。

藤山教諭 ……？

タテガミ (藤山教諭の小耳に) 気にせんでください。梶はアホなんです。

藤山教諭 じゃ、きみらはなんや。なんでみんな梶くんずっと立つ

とんの、だまってたんや。

タテガミ その疑問はごもつともです。しゃあけえ、この組はあん

たの組やし――

藤山教諭 わしは組長か。で、きみらみんなその家来なんやな。

タテガミ 子分、じゃないですか、先生。

藤山教諭 もうよろし。(呼んで) 学級委員。松島。……(返事は

ない。教室のなかに一つだけ空席となった席がある。) 松島は

どうした？

タテガミ 松島は今朝の朝礼で倒れまして、そのまま保健室の方で

――

藤山教諭 朝からずっと寝とんのんか!?

タテガミ またド忘れですね、先生。

藤山教諭 梶くん。はやく自分の席につきなさい。

ぼくは自分の席に座る。

藤山教諭は黒板の前に立ち、「今月の目標 忘れものをしてない」の貼り紙に気づき、それをペリベリと破ると客席に投げ捨てる。

藤山教諭 エー、みんなが生まれる少し前、私たちは戦争をしました。二つの目標のために私たちは戦争をした。そんな人います。でも、先生はそうは思いません。その戦争に負けるまで、私たちはみんな一人の神様の家来だった。そんな人もいます。でも、先生はそれもそう思いません。ずっとずつとながいこと、私たちはみんなにかの家来でした。大工さんは棟梁の、床屋さんは親方の、漁師さんは網元の、消防士さんは消防署の、会社員は会社の、おかあさんはおとうさんの、おとうさんはおじいさんの家来でした。必ずしも一人の神様の、ではありませんでした。そして、戦争に負けて、私たちははじめて自分自身の家来になりました。私たちは自分自身の家来であり、同時に自分自身の神様になったのです。――

ぼく (手をあげ、大声で) 先生！

藤山教諭 なんや、梶くん。

ぼく それじゃ、自分自身でゆーのは二人いるんですね。

藤山教諭 二人なのか、三人なのか、もっとたくさんなのか、いまはまだ先生にはわかりません。

ぼく ぼく、知ってます。おじさんが教えてくれたんです。この空の彼方には、緑の野と、小鳥と、そして、ぼくによく似たもう一人の……

藤山教諭 (真剣に) 夢みたいなこと、いうんやない！・

ぼく 夢？ ……なんでそんなこというんですか！

教室の入り口に一人の少女がユラリと立つ。女子の学級委員の松島トモコだ。

ぼく 松島!?

松島 (夢うつつに) たすけて……殺されるわ!

ト、気をうしないそうになる。

あわてて駆け寄る藤山教諭の腕のなかに松島はくずおれる。

藤山教諭 松島! ……きみ給食は? 食ったんか?

松島 (パチツと目をあき) あたし、ずっと夢を見てました。とて
もこわい夢でした。だれかが殺されそうになる夢でした。この
クラスのだれか…… (ト、腕からはなれ生徒たちを見まわす。
ゾツとする生徒たち)

藤山教諭 なんや、夢か。

松島 でも、ほんとなんです。ねえ先生、たすけてあげて。(ト、
救いを求めるように手をさしのべ) ねえ、タテガミくんも。ね
え、タコヤマくんも……アンジョーくんも…… (生徒たちは思
わずあどずさる。松島はぼくと目があう。ぼくは真っ赤になっ
て目をふせる) たしかにこのクラスのだれかだったの! ……
あたし、体よわくてあんまり学校来られないけど、いつもみんな
なのこと、家で夢に見てました。夢のなかでいつもみんなと一
緒でした。いまこうしてあたしとみんなが一緒にいるのがほん
とうなら、同じあたしとみんなが、別のとき別の場所にいるこ
とだつてほんとです。もしそれが夢なら、いまこうしてあたし
とみんながいるのだから。でなきや、そんなのひどいわ。
……われ思う、夢にわれあり。

自分の赤いランドセルを背負い教室を出ていこうとする松
島を、一同なすすべもなくただながめている。

松島 (一同にニコリと微笑みかけて) さよなら。あたしひとりで
もきつとたすけてみせるわ。

ト、去る。

授業終了の鐘が鳴る。

タテガミ 起立！ 礼!?

藤山教諭 松島！

ト、松島のあとを追って去る。

生徒たちも田手上を先頭にワイワイと去る。

だれもない教室にぼくだけがひとり残される。

ぼくは黒板に大きく書いてみる。すなわち――

ぼく われ思う、夢にわれあり……

ぼくは泣いているのかもしれない。わけもなく悲しかったのだ。

ヤスベーが仕事の手をとめ、顔を上げる。

ヤスベー ぼくはいまでも、ニジツセイキの悲しみが交錯したような青い都会の夕べ、街角のプラタナスの下でふるえている白い電灯を見ると、なぜかコウちゃんが泣いているように思われてならないのです。

ぼく (彼方へ叫んで) おじさん！

ヤスベー ……

ぼく ねい、おじさん。

ヤスベー (やさしくこたえて) なんだい、コウちゃん。

ぼくの背後に巨大なマンガ本が壁のようにそびえ、教室をのみこむ。

ヤスベーは机から立ち上がると電信柱に歩み寄り、裸電球

の仄暗い明かりのなかで影のように電信柱にはりついた帽子とコートをひきはがし、身体にまとい、画帖をかかえる。その姿はもう、なんてやさしいおじさんだ。

ぼく 夢じゃないもんね。ほんとにいるんだもんね。

ヤスベー 永遠の遠国にいるあの子のことかい？

ぼく あの子はぼくの家来？ それともぼくの神様かしら……

ヤスベー 町はずれに落ちていた。街燈の下に落ちていた。——なんだ？

ぼく ええつと……第二ヒント！

ヤスベー あの子がそれをひろっても、けしてマントにやなりません。

ぼく わかった！ ぼくの影。

ヤスベー 正解。——第一ヒントでわからなかった？

ぼく そうだと思ったよ。

ヤスベー どうだか。

ぼく ……ねい、おじさん。

ヤスベー なんだい、コウちゃん。

ぼく もっとそばへ来てよ。

ヤスベー、マンガの世界へ没入する。

いきなりぼくは「うわああっ」という声とともにヤスベーの胸にとびこみ、泣きじゃくる。

ヤスベー (ぼくの肩を抱き) 大丈夫。……ねい、コウちゃん。

ぼく (顔を上げ、ヤスベーの目を見て) ……

ヤスベ ……勇気があるかい。

ぼく ……うん。

ヤスベー ついてくるね。

ぼく どこへ？

ヤスベ― 夏の扉の向こう側。きみの夏休みへさ。

ヤスベ―とぼくは客席に背を向け、マンガの壁と相對する。

ヤスベ― (呪文のように) アノクタラ、サントシル、ソワカ!

ト、唱えるや、マンガの壁が音もなく割れる。

ヤスベ―はぼくの肩を抱き、二人はマンガのなかにのみこまれるように消え去る。

上手からムジナ出版の田手上が登場。

田手上 イヤー、だれもおらんですよ、先生。ソバ屋じゃなかったのかな。でも、たしかにきこえたもんな、「こんばんわ」つてどっからきこえたんだろ。(ト、下手の机まできて、描きかけの原稿に目がとまり、読んで)「その疑問はごもつともです」ンン? (つづけて読んで)「しゃあけえ、この組はあんたの組やし」……アア……また勝手にひとのキャラクター使っちゃって。先生先生。あれ? (ト、あたりを見まわし) トイレかな? 先生? ……先生!

ト、呼びながら下手へ去る。

田手上の声と交錯して下手からなつかしい声が。それはぼくの母の声にちがいない。

母ウちゃん……コウちゃん!

その三 ヨキコハ イクヨ。

マンガの壁が割れると、そこは安アパート金井荘の六畳一

間のぼくの家。

夕餉の茶ぶ台に向かい手酌でビールの父は、ぼくの鉱石ラヂオのイヤホンを耳に野球放送をきいている。巨人対国鉄の熱戦？

茶ぶ台の脇でぼくは「アノクタラ、サントシル、ソワカ：…」と忍者よろしく呪文の稽古だ。

外からは盆踊りの太鼓と『東京五輪音頭』が遠く近くきこえる。

下手から母が味噌汁の鍋を持って登場。

母 ……コウちゃん！ （茶ぶ台につき）はやく食べちゃってよ。

ぼく ハイイ。

ト、茶ぶ台につき、ご飯をかつこむ。

母と「ぼく」のタクワンを噛みしだく快い音がしばし食卓を支配する。

ぼく （父に）どっち勝ってる？

父 ……

ぼく ねえ、長島は？ ホームラン打った？

父 打てるもんか。こっちや金田だからな。

ぼく おとうさん、ラヂオ交替。

父 ……

母 （はやく食べなさいと）コウちゃん。盆踊り行くんでしょ。

ぼく （再びご飯をかつこみながらブツブツと）だって、ぼくの鉱石ラヂオなのに… （母に）ねえ。うちのラヂオ、もうなおらないの？

ないの？

母 おとうさんにきいてみたら？

ぼく おとうさん、うちのラヂオもうなおらないの？

父 ……

母 コウちゃん。盆踊りだれと行くの？

くひとり。

母 友達誘いな。

ぼく いないもん。

母 こわいおじさんにチンチンちよん切られるよ。昨日も一人やられたんだから。

ぼく ……

母 ユカタ出しといたからね。

ぼく いいよ。

母 せっかく出したのに。

ぼく ヤグ。ユカタなんか女じやん。

母 見してくれたたっていいじゃんよ。コウちゃんのユカタ姿。へへ…

父 (いきなり) バカクソツ! 長島のヤロー! ——

ぼく 金田打たれました! 国鉄スワローズついに二〇連敗!

父 応援なんてもうヤメヤメー (ト、耳からイヤホンをむしりとり、ラヂオを抛る)

ぼく ぼくのラヂオ! (ト、あわてて拾う)

父 飯くれ。

ぼく 国鉄なんか応援するからいけないんじゃないか!

父 なにっ!?! ……

ぼく だから、おとうさん、ダメなんだ!

母 コウちゃん。

ぼく ……初めから負けるって分かってるのに。

父 ……

母 (父に茶わんをさしだし) ハイ。ご飯。

ぼく (ペコリと) ごつつあんでした。

ト、箸を置くと、コロリとその場に横になり、鉱石ラヂオのイヤホンをそつと耳にあてる。

カチャカチャと父の箸が茶わんにあたる音。

ぼく (ブツブツと) ……巨人。ピッチャーニ宮光。投げました。

ア!? 消えた。ボールが消えた。出ました。消える魔球。徳武、三振です。

父 コージ。ラヂオなんかもうきくな。

ぼく ……

父 (ポツリと) ラヂオはテレビに負けるよ。

ぼく (あちら向きにラヂオをききながら、ポツリと) 国鉄は巨人に負けるよ。

父 ま、いまだきテレビくらいなくっちゃな。

ぼく (ガバツと父に向きなおり) テレビ買うの!

父 ふふふ…

ぼく ねえ、いつ買うの!

父 (ニヤニヤと) まだ買うとはいってないさ。

母 そうよねえ。ラヂオなおすお金もないんだから。

父 (ムツとして) オイ! ——

ぼく (父に) ラヂオならこれ、ぼくのあるもんね。交替できるしね。買おうよ、テレビ。

母 夢よ、いつもの。おとうさんのお得意。

ぼく ウルサイ!

母 かなわぬ夢のキューサクちゃん。

父 オイつけてきこえないのか。

母 なアに、キューサクちゃん。

父 これはなんだ。(ト、皿からタクアンをつまむと、皿中のタクアンが見事につながっていた) なんだってタクアンをつなげて切るんだ。

母 しょうがないでしょ。マナ板へこんでんだから。

父 なら、そんなもの捨てて新しいの買えばいいだろうが。

母 アタシだって買いたいわよ。でもアンタ、自分が一体いくら給料もらってきてると思ってるの? え?

父 オ、オレのいってんのはな、毎日疲れて帰ってきて、オカズく

らいまともなもん食わせろってことだ。

母 アタシだってそう思うから、毎日少しでもおいしいもんを食べてもらおうってマナ板も買わずにやってんじやないかよ！

父 ウクツ……そそそれがキサマのつとめだい！

母 ないよつ。アンタみたいなデブにキサマ呼ばわりされるおぼえはない！

父 アッアッ、言ってくれたな！（ト、拳をふりあげ）コノツコノツ……。

母 わあっ！（ト、泣きくずれ）あの晩アタシが盆踊りなんか行かなきゃよかつたんだア……

ぼく 盆踊り？

母 そうよそうよ。十年前に盆踊りでアンタなんかと出逢ってなきやあ、今頃こんなタクアンがつかってたことなんかで叱られずにすんだのに……

父 オレだってあんなクソ盆踊りでキサマと逢ってなけりや、今頃気だてのいい嫁つこと暮らしてらあ！

母 （食器をサツサとかたづけながら）コウちゃん、はやく行きな、盆踊り。

ぼく （いきなり自分にふられて）エエ！ だつてさア……
父 オ、オイ！ オレはまだ食べてんだぞ。

ぼくは意味もなく畳の上をゴロゴロしていた。

母は食器を台所へ運ぼうとしてぼくにつまづきオーバーにこける。

母 もうたくさん！ こんなキュークツな暮らし。（ト、台所へ去る）

父 キサマがここがいいっていったんじやないか！ もう忘れたのか！ ……（母の口真似で）「あアら、アナタ、このアパートにしましよようよ。金井荘なんて、名前が素敵だわ」（台所に）

オレはいったよな！ ……金井荘のどこがそんなに素敵なんですか、ヨキコさん。 ……そしたらキサマなんてった！ 「だって、そのうち夢がカナイソー」へへんダ。アホー！ ……オイ、きいてんのか！ アホーっていったんだぞ！

ぼく おとうさん。ぼくね、アホのまねうまいよ。（ト、アホな顔で）あんす、わてアホやんねン

父 （あきれかえって） ……

母がユカタを手にもどった。

母はそれを強引にぼくに着せようとする。

ぼく やめろ触るな。乳クセー。（ト、逃げまわる）

父 いやだっというものヨセツ！

母 （なにかを必死でこらえて） ……

父・ぼく （母の様子に気づき） ……!?

いきなり母が嘔吐する。一瞬にしてユカタは吐瀉物にまみれる。

背景のマンガの壁の向こうからヤスベーが現れる。ヤスベーの姿はぼくにしか見えない。

父 （母を腕に抱き） どうしたんだ？ おい。ヨキコ。

ヤスベー ヨキコハ、イクヨ。

ぼく （ギョツとしてふりかえり） え？

ヤスベー ヨキコハ、イツテシマウノダヨ。

父 コージ。すぐに二丁目の先生呼んでこい

ぼく ぼく……盆踊り行かなくつちや！・

1

『東京五輪音頭』が場を圧倒する。

マンガのなかからユカタ姿の踊り手たちがくりだし、お茶

の間をのみこむ。
呆然と立ちつくすぼくの頭のなかで、踊りの輪がメリーゴーラウンドのようにグルグルと空しく回転する。
その踊りの輪のなかにぼくは、クラスメイトの生徒たちやタテガミやユカタを着てたたずむ松島や、そして、ぼくに
よく似たもう1人のぼくの影を一瞬見たような気がする。

その四 消える魔球

原っぱ。

暮れなずむスミレ色の空。盆踊りの太鼓が遠くにきこえる。
ぼくがクラスメイトの生徒たちに囲まれている。
ユニフォーム姿のタテガミが、佐々木小次郎よろしく背中
にしよった長いバットをスランと抜き、切っ先をぼくに向
ける。

タテガミ 遅いぞ、梶コージ。さあ、おれと勝負だ！ (ト、バツ

トをぼくに抛る)

ぼく (あやうく胸でうけとめ) ヨッ、タテガミ。

タテガミ 約束の時間に遅れてくるなんてよ、おまえ宮本タケゾー
のつもり？

ぼく タケゾーじやねえよ。それムサシって読むんだ。

タテガミ 子供のときはタケゾーっていったんだ！ 知らなかった
ろ、梶。それでよ、タケゾーは牛若丸と勝負して負けて家来に
なって、宮本武蔵坊弁慶になったんだ。だから、おまえもおれ
に負けて家来になれば？

ぼく なにいったんだよ、おまえ。

タテガミ いくぜ、梶！

ト、舞台中央で白球を握った腕をブルンブルンまわす。
生徒たちはグラブをはめ、田手上の背後で守備位置につく。

舞台前面にはキャッチャー役の生徒が客席に背を向け座る。
ぼく 勝負なんかしねえよ。

タテガミ なんでだよ!?

ぼく 負けるもん。ぼくにおまえの球、打てるわけないじゃん。

タテガミ じゃ、これなんだよ。(ト、墨で書かれた手紙を見せる)

ぼく (表を読んで) ちよーせんじょお!?! ……知らねえよ、そんなの。

タテガミ 梶コージって書いてあんだろ。(ト、ぼくに抛る)

ぼく (開いて読んで) 「タテガミくんとやら。きみはたいそうス

ゴイ球をほおるそうだが、ぼくにはヘナチョコ球だ。夜七時。

盆踊りで待ってるぜ。じしん・かみなり・梶コージ」一ほんと

だ……

タテガミ いくぜ! (ト、有無をいわず投球動作に入る)

ぼく ア!?! ちかいの魔球!?!

タテガミの投球フォームは、ちばてつや作『ちかいの魔球』の主人公二宮光そのままのアンダースローのサウスポード。タテガミの腕がフシユツとうなりをあげるとほとんど同時に、キャッチャー・ミットがズババンと音をたてる。あまりに速すぎて、ぼくにはボールが見えなかった。(もちろん観客にも)

ぼく (独白) 見えない……

生徒たち スットライークー (キャッチャーの生徒がタテガミに

ボールを投げかえす)

ぼく たんま。タテガミさア、消える魔球はナシナシ。

タテガミ ちばてつや作。少年マガジン連載。『ちかいの魔球』
ぼく フツターの球でいこお。

タテガミ おまえ、消える魔球がほんとにあると思ってるの？

ぼく なにがよ。

タテガミ マンガの読み過ぎだ、梶。(ト、問答無用に)ピッチャー、第二球、ふりかぶりました！

ゆつくりと投球動作にはいるタテガミを中心に一同グルル
と舞台を百二〇度回転する。

ふたたびフシユツューズババン！

生徒たち スットライーカー

ぼく (独白) あるじゃん。消える魔球、あるじゃん！

タテガミ (キャッチャーから返球を受け) 梶！ どうしてバット

振らねんだよッ！

ぼく タテガミさア、ぼくおまえの家来でいいわ。

タテガミ ド真ん中投げてんだろ！

ぼく 野球ってよ、見てるほうが楽しいぜ。

タテガミ バカ！、1、2の3でバット振ってみろ！

ぼく 見えねんだよ！

タテガミ (腕をグルグルまわし) 第三球ー

ぼく タテガミさア、ぼくアホのまねうまいよ。

タテガミ ピッチャー、振りかぶりました！

ふたたび一同グルルと百二〇度回転。

見えない白球がうなりをあげてミットに！ズババン！

ぼくはとうとうバットを振ることができなかつた。

生徒たち スットライーカーアウトー

ぼく タテガミさア、おまえの球、長島だってゼツタイ打てないよ

な。

タテガミ 家来なんかしてやんないよ。おまえなんかいてもいなくても一緒じゃねえか！

ぼく だって、ほんとに見えねんだよ。

タテガミ 見えねえのはおまえじゃんか。おまえ、透明人間じゃないか。

生徒たち (はやしたてて) じしくん・かみなり・梶コージ (繰り返して) ……

タテガミ、生徒たちを従え揚々と去る。

ぼく (タテガミの後ろ姿に) そうやく、わてトーマーニンゲンやんねんく！ (盆踊りの太鼓が空々しく響く) うるせえぞ、盆踊り！… (首からさげた双眼鏡をのぞき) へへ、ヨキコとキューサクはあすこで出逢ったのが。おーい！ ラヂオはテレビに負けたぞおー いいか！ タクアんだぞおー おーい！ …… (悲しくなって) おおい… おじさん。盆踊りの太鼓がさ、ドドンガドン、ツラカッタ… ってなってるぞ。ねい、おじさん！

ヤスベーが影のようにぼくの背後に立っていた。

ヤスベー ヨキコは、行ってしまったよ。

ぼく ウルサイ！

ヤスベー ……

ぼく (心細く) おかあさん、どこ行っちゃったの。

ヤスベー 産婦人科。

ぼく シェー!?

ヤスベー キューサクはさ、ヨキコに新しい子供が生まれると思ってるんだ。

ぼく ヘン。どうせぼくなんかよ、生まれてスイマセンだ。

ヤスベ― まあまあ……（ト、ピースを取り出し）一服どうぞです。

ぼく 禁煙中。

ヤスベ― 知らなかった。

ぼく ま、妹もできることだしよ。

ヤスベ― そうか。コウちゃん、妹がほしいんだ。

ぼく ねい、いつ生まれるのかな？

ヤスベ― トツキトーカというからねえ……。

ぼく トツキトーカ？

ヤスベ― 「胎児の夢」と呼ばれる思想があったなあ。永遠とはト

ツキトーカの譬えかもしれない。

ぼく （ひとり合点の独白）ふ1む、十月十日に生まれるのか。け

ッ、オリンピックの始まる日じゃんか。メデタイやつめ。へへ、

家来にしてこきつかってつかわす。

ヤスベ― ねい、コウちゃん。

ぼく なアに、おじさんチャン。

ヤスベ― ぼくはコウちゃんの家来……だよね？

ぼく ほんとだね、ちゃんと勝負して負けなきゃだめなんだよ。ぼ

くみたいに立派に。

ヤスベ― 負けても家来にしてもらえない人もいるけどね。

ぼく こいつ、やるかッ。

ヤスベ― やりたい？

ぼく （首を振って）ウウン。

ヤスベ― コウちゃん、ほんとに悪さするより考えて楽しむほうだ

もんね。

ぼく ……おじさんはさ、どうしていつもぼくが呼ぶとすぐに出て

くるの？ オツ、そろそろコウちゃんが呼ぶころだぞ、ってわ

かるの？ どうして？ 。おじさんはぼくといないときはなに

してるの？

ヤスベ― コウちゃんに呼ばれるのを待ってる。

ぼく そんなんあり？

ヤスベ― ただ待ってるわけでもないさ。ハモニカ吹きながら待つてたり、マンガを描いてるときもある。

ぼく マンガ家なんだり！

ヤスベ― (頭をかいて) イヤ、それはどのもんでもあるさ。

ぼく じゃあ、消える魔球、信じてる？

ヤスベ― もちろん信じてる。

ぼく ほんとに消えるやつだよ。

ヤスベ― ほんとに信じてる。

ぼく ホントーッに見えないやつだよ。

ヤスベ― だからさ、見えないからさ、信じるしかないんじゃないか。

ぼく 信じてると見えるようになるの？

ヤスベ― 見えなきやダメ？

ぼく ホームラン打ちてえよお。

ヤスベ― たとえ、それがエーエンに見えないとしても、それを信

じ、それを希い、それにみちびかれんとするのです——なんだ？

ぼく エエ!?

ヤスベ― 上に「マ」のつく。

ぼく マ……マ―ブルーチョコ。

ヤスベ― いま話していた。

ぼく マキユウ？

ヤスベ― 第三ヒント。コウちゃんが大好き。

ぼく 松島トモコ!?

ヤスベ― あの松島トモコ？

ぼく ちがうよ。ぼくのクラスの——(真っ赤になって) いいじゃ

ねえかよオ。

ヤスベ― 正解は——マンガでした。

ぼく わっかんねえよ。問題が失格。

ヤスベ― ごめん。だから、ぼくの描いてるマンガのときさ。

ぼく フーン……

ヤスベー ぼくはさ、コウちゃん、ぼくは、この世における正義の勝利を信じている。この地上で善人は必ず幸せになれると信じている。この手でいつか全き真理をつかむことができるかと信じている。……マンガ。そういうこと。

ぼく ねい、おじさんはどっから来たの？

♪ 色んな町をあるいたさ

麓のまち 海のまち

月の街道もあるいたし

星の屋根にも身をよこたえた

沈む 広がる 泣きぬれる

この身はつねに 夜の霧

ぼく ぼくもおじさんのように旅をして、そして、いつかあの子に逢えるのかしらん。

ヤスベー (空を仰ぎ) 星はなんでも知っている……ってね。星とは、永遠という思想の故郷かもしれない。

ぼく おじさんはエーエンノオンゴクに行ったことがあるの？……
ねい、おじさん。

ヤスベーはさらに歌いつぐ。

♪ 色んな野原をあるいたさ

小暗きのはら 夜々のつち

草のまくらを友とよびや

すぎた日のことが夢を醒ます

沈む 遠のく まといつく

想いはつねに 夜の霧

ヤスベーは歌い終わり、マンガの世界を出ていこうとする。

ぼく 行かないで1

ヤスベ― (ふりむいて) ……

ぼく ねい……おじさんの名前は？

ヤスベ― 人さらい。

ぼく ヒトサライ……

光る稲光。少し遅れて遠雷。

マンガの壁が迫りだし、ぼくをのみこむ。

ヤスベ― 我ハ汝ヲ、愛ス者ナリ。……一瞬の思いが稲光となって
ぼくの目をくらませたあと、少し遅れて、遠い雷鳴のようにこ
とばがぼくの口からこぼれました。(ゆっくりと仕事机に向か
いつつ) そんなふうには、ことばはいつも手遅れなのです。でも、
その夏、コウちゃんたちが待ちこがれていたのは、遠い雷鳴の
そのまたあとにやってくるものでした。ことばのあとにやっ
くるもの。それは思い出しみこむ雨。(突然の雨音。ヤスベ
―は机の上の原稿を取り上げ、読んで) 「おや？ 先生!? タ
立ちですよ。……」

その五 がんばれ、国鉄スワローズ

マンガの壁が割れると、そこは母の病室。

中央に置かれたベッドでは、母のかわりにぼくが眠ってい
る。

ベッドの脇では父が白衣の医師となにやら真剣な顔つきで
話している。

下手の仕事机ではヤスベ―がペンをはしらせている。

雨の音にまじって遠雷が間の抜けたようにきこえてくる。

父 (空を見上げ) おや？ 先生!? タ立ちですよ。(ト、言うや

いなやピタリと雨がやむ) ちょ!?! もうやんじまいやがった。
……まったくひどい水不足ですねえ、先生。

ぼく (寝言で) おじさん……

父 (ぼくを見て) かわいそうに、この子もせつかくの夏休みだつてのにプールにもはいれないんですからねえ。

ぼく (ガバと起きあがり) おじさんッ!

父 コージ。おまえ、ズボンの前が出っぱってるぞ。

ぼく (あたりを見まわし) ねえ、おじさんは?

父 はやくションベンしてこい。

ぼく ハイイ。(ト、下手へ去りかけて、ふりかえり) おとうさん。

父 なんだ。

ぼく おとうさんは正義の勝利を信じてる?

父 だれに教わったんだ、そんなこと。

ぼく やさしいおじさん。ぼくの家来。

父 いいからはやく行ってこい。

ぼく (去り際に医師に呪文をかけて) アノクタラ・サントシル・

ソワカ……

父 コージ!

ぼくは去る。

父 それで先生、そのお、手術のことなんですけど……

医師 こちらを見てください。(ト、レントゲン写真をかざし) 地球には南半球と北半球とありますね。いいですか。人間の脳の場合は(ト、指で示し) 右半球、左半球と呼びます。

父 するってえと、ここが赤道ですね。

医師 奥さんの腫瘍はこの右半球の、ここです。ここが白くなっているでしょ。

父 先生、これ、日本列島に似てませんか。

医師 これがどんどん成長しているわけです。

父 高度成長か。

医師 出産でいえばもう臨月間近。そのくらいの状態だと思ってください。

父 (おかしくてたまらないふうに) うちのコージのやつね、ヨキコに新しい子供が生まれると思ってるんです。いえね、はじめにヨキコを二丁目の先生んとこ連れてったもんですから。

医師 二丁目の？

父 だから、コージの生まれた産婦人科の――

医師 いいですか、梶さん、いまあなたの奥さんに残された道はただひとつ、手術しかありません。

父 それそれ、その手術なんですけど先生、ヨキコの奴あれで以外に暗示に弱いとこあってね、ですからここはひとつ手術じゃなく、催眠術じゃだめでしょうか。

医師 ぼくは引田天功ですか？

父 いやいや、実は、わたしの工場の方が倒産しちゃって……。まったたく、オリンピック景気なんていって、こっちじゃ工場がバタバタつぶれてるんですからねえ。

医師 梶さん。

父 もちろん！ 入院代はなんとかします……。けども、手術代まではとてもとても……

医師 たしかに、まだ催眠術の方がマシなのかもしれない。

父 ね。そうでしょ。

医師 手術で奥さんが助かる見込みはおそらく1割もないでしょう。父 1割り!?

医師 しかし、手術しなけりゃあと1カ月、長くてもオリンピックの始まる頃には奥さんは……

父 1割って先生、国鉄スワローズだってもっと勝ちますよ。

医師 エ？

父 わかった。やりましょう。手術やりましょう。わたしが応援します。

父と医師はなにものかの気配に下手をふりむく。と、そこにはユカタ姿の母が青白い顔で立っていた。話はすべてきかれてしまったのか？

父と医師は、緩慢な動作でベッドに横になる母をことばもなくながめている。

医師、退場。いれかわりにぼくがもどってくる。

ぼく おとうさん、売店でコココーラ買ってもいい？

父 ムダ使いするな。

ぼく でも、ぼくはまだ飲んだことないんだよ。

父 クスリ臭くて子供に飲めるもんか。

ぼく 学校じゃみんな飲んだことあるって。

父 水でいい、水で。

母 コウちゃん……

父・ぼく (母を見て) ……

母 こっちおいでよ。

ぼく いいよ。

母 どうして？

ぼく なんでも。

父 コージ。(ト、母の方へ「ぼく」の背中をポンと押す)

ぼく (母の胸にのめりこみ)ウプ……

母 おかあさん、臭い？

ぼく ウン。

母 クスリ臭いの？

ぼく なんだかニワトリくさい。

母 それはね、かあさんの体の中で猫が暴れてるの。それで、ニワトリ殺して食べちゃった。

父 ……コージ、おまえ、先に家帰ってろ。

ぼく おとうさんは？

父 まだ先生と話あるから。

ぼく (母のユカタを指さし、父の耳に) あれ、ぼくのユカタだよね。

父 (声ひそめ) うん。洗濯、間にあわなくてさ。

母 アタシも一遍、飲んでみたいな、コカコーラ。

父 (あわててポケットの小銭を探り) コージ。濃いイとこ一本買ってきな。

母 いいの! ……だって夢はね、カナイソーなままがいちばんいいの。

父 (独白) そのうち夢が金井荘。

ぼく (独白) それじゃあ夢が川井荘。サイテー。

母 コウちゃん。手紙、ありがとね。

ぼく テガミイー!?

母 (懐から大事そうに手紙を出し) おとうさんに読んでもいいかな?

ぼく 知らねえよ、そんなの。

母 (読んで) 「ヨキコさんとやら。こどものころ、アナタの夢はバスの車掌さん。おり物工場の女工のころは、アナタの夢は美容師さん。——」

ぼく ぼくじゃないからねッ。

母 「夢はなんべんやぶれても、いつかは幸せつかまえて。アクセーシユヨーなんかに負けるなよ。じしん・かみなり・梶……(目をこすって) ……」

父 オマエ、知ってたのか!?

母 見えないわ。コウちゃんの名前が。さつきはちゃんと見えたのに。……

父 先生。……先生! (ト、医師を呼びに去る)

ぼく ぼくが書いたんじゃないからねッ!

母 (ベッドから下り、手探りでぼくに近寄り) コウちゃん、どこにいるの? アナタが見えないの

ぼく (恐怖にひきつりうずくまって) 許して。……許して！

父が医師と看護婦を連れてくる。

医師らは母をベッドに連れてゆく。

ぼく (医師にとびかかり) おかあさんにさわるな！

父 コージ！ (ト、ぼくを医師からひきはなす)

ぼく おかあさんは病気なんかじゃないぞ！ おかあさんは子供が生まれるんだ。ぼくの妹なんだ。病気はぼくだよ。ぼく、透明人間病なんだ。(彼方へ) そうだよね、おじさん。……おじさん！

ヤスベー (画帖を手に立ち上がり) アノクタラ・サントシル・ソワカ。

ぼく アノクタラ・サントシル・ソワカ！

ヤスベー 巨人。ピッチャーニ宮光。第一球。ふりかぶりました！

医師と看護婦は母を寝かせたベッドを運び去ろうとしていた。

ぼくは二宮光よろしくふりかぶり、見えない球を医師めがけて投げる。

空気を裂いて球の走る音。そして——ズババン！

医師、ウググツと唸り声をあげ、尻の穴をおさえてうずくまる。

ヤスベー つづいて第二球。投げました！

ぼくは今度は看護婦に消える魔球を——ズババン！
看護婦、悲鳴とともに腹をかかえて身をよじる。

ぼく (勝ち誇って) ハ・ハ・ハ……

看護婦 あたったわ……

医師 昼飯のシメサバがア……

父 (袖に) 急患ですよ!

ぼく (なおも勝ち誇って) ハ・ハ・ハ……

ト、笑っている間に母は運び去られ、ぼくひとり置き去りにされた。

ぼく ……おかあさん!?

ヤスベーは上手の電信柱の下に画帖を開いて立ち、ぼくの後ろ姿をスケッチしていた。

いつの間にかヤスベーの仕事机にはソバ屋の出前の女が座り、密かに原稿を調べていた。

出前の女 (読んで) 「……この子、友達がいな。ナンナンナツ

メの花の下でお人形さんと遊んでばかり」

ヤスベー (ぼくに語りかけるように) ねい、コウちゃん。さみし

さは、野原がよこした黄色い小さな勲章じゃないか。

出前の女 「この子、夜眠らない。天井の模様でロールシャツハテ

ストばかり」

ヤスベー きみは、眠ったはずなのに電燈が消えると目が覚めてしまふような、うすむらさきの夜明けの空気のなかでは知らず知らず息をとめてしまうような、そんな種族の少年なんだ。

出前の女 「この子、スポーツをしない。体育の時間にはいつも見学ばかり」

ヤスベー きみの体は薄翅カゲローの翅の透明さだ。虹をかける勇気の薄翅だ。きみは時空を超えて飛びかう観念のスポーツマンなんだ。――

ぼくが彼方をふりむく。

ぼく (ボソリと) ことばなんか……もういらないよ。(ト、去らんとす)

ヤスベ― コウちゃん……

ぼくはいま一度彼方をふりむき、そして、ゆっくりとマンガのなかに消え去る。

その六 原寸大のコカコーラ

ヤスベ―の仕事部屋。

疲れ切った足どりで仕事机にもどるヤスベ―。ところが、そこにはソバ屋の出前の女が座っていた。

出前の女は、松島によく似ている。

出前の女 (ヤスベ―を見てニヤリと) つづきはどうなるのかな？
ヤスベ― (ことばもなく) ……

出前の女 (原稿をもどし) ヤスベ―先生……でしょ？ (立ち上がり) ハイ、これ、プレゼント。

ト、高層ビルのようにソバの積まれた盆をトーンとヤスベ―に渡す。

ヤスベ―は、あまりの重さによるけ、その拍子にくずれそうになったソバを建てなおそうと盆を持って舞台を右往左往する。まるで盆踊りだ。

出前の女 そのかわり質問してもいい？

ヤスベ―（必死にソバと格闘しながら）悪いけどいま手がはなせないんだ。

出前の女 心配しないで。簡単な質問だから。――

ヤスベ―はやつとのことで盆を床に置いた。

出前の女は、取材記者気取りにノートと鉛筆を持ち――

出前の女 あなたにとってコココーラとはなんですか？

ヤスベ―（ドキツとして）え!?

出前の女 たとえばですね、もしあるときあのコカコーラを飲んでいればって、そんな思い出はありませんか？

ヤスベ― ……

出前の女 では、あなたがいまいちばんコココーラを飲ませてみたいと思う人は？

ヤスベ― MC・ハマ―。

出前の女 だれ、それ？

ヤスベ― 昔流行ったんだ、そういうおじさんが。

出前の女 知らないなあ。（ト、ノートして）次。あなたが初めてコココーラを飲んだのは何歳のときでしたか？ もしおぼえて

いるなら、初体験の感想もきかせてください。

ヤスベ―（ついに爆発して）どうしてぼくがきみにそんなこと話さなくちゃいけないんだ！

出前の女 あたしもね、先生みたいにコココーラが出てくるマンガ描こうと思ってるの。

ヤスベ― だったらひとにきかずに勝手に自分で描けばいいじゃないか。

出前の女 先生はマンガ描くとき取材ってしないんだ？

ヤスベ― だれがどうやって描いたって同じなんだ、マンガなんかどう頑張って描いたって、どうせ同じワンパターンの愛と勇気と友情の繰り返しなんだ。どうせいつかどっかで読んだような

ものしか描けやしないんだよ。

出前の女 先生!?!?! マンガ嫌いななの?

ヤスベ― ……

出前の女 あたしはさ、そんなことはどうでもいいの。あたしは有名になりたいの。それだけ。

ヤスベ― いくらだって有名になれるさ。マンガさえ描かなければね。

出前の女 マンガはもうだめだって、先生そう思ってるのり:

ヤスベ― ぼくのいいたいのはね、コココーラのでてくるマンガなんか描くより、ふつうにコココーラ飲んでた方がずっといいってことさ。ふつうにコココーラ飲んでさえいれればきみだってそのうち有名になれるかもしれない。

出前の女 コカコーラ飲んでるだけで?

ヤスベ― あの宮本武蔵だってね、もしもコココーラを飲んでさえいれればいまよりずっと有名になれたんだ。

出前の女 どういうこと?

ヤスベ― 宮本武蔵は巖流島へ行くときに竹の水筒を持っていった。いいかい? 水筒の中身はただの水。コココーラは入れてかかったんだ。

出前の女 そりやそうよ。もしコココーラを入れてったとしたって途中の船なかでヌルくなっちゃうもんね。

ヤスベ― もしもヌルくなったコココーラを持って巖流島へ向かったら、宮本武蔵は佐々木小次郎との決闘よりも、命を賭けた勝負の前にヌルいコココーラを飲まなければならなかった男として、いまよりずっと有名になれたんだ。

出前の女 (あきれて) あのねえ……

ヤスベ― そういうもんさ。

出前の女 先生さ、ヌルくなったコココーラ飲まされる側の気持ちになったことある? ないでしょ?

ヤスベ― でも、飲まなかったんだよ、宮本武蔵は。

出前の女 もし飲んでたらっ1て想像するだけで充分ひどいわ。又ルくなったコカコーラだなんて……

ヤスベ― そんなにまずいの？

出前の女 飲んだことないんだ!? (つくづく) いいわねえ……

ヤスベ― だいたいコカコーラってのを飲んだことがないんだ。だから、こうしてこんなマンガ描いてるわけさ。

出前の女 エエ!?

ヤスベ― ぼくね、ときどき自分のまわりのいろんなものが原寸大の模型に見えるんだ。たとえば(ト、机の上のコーラ壺を手に)このコカコーラにしても、原寸大のコカコーラの模型に見えるやう。そうすると、ぼくはもうこれを飲む必要がないのだから、ただ眺めているだけでとても満足できちやうのさ。

出前の女 カワイソーねえ……

ヤスベ― そんなこともないけど。

出前の女 あたしがカワイソーっていったのは……死んでゆく人。先生のマンガのなかで。

ヤスベ― え？

出前の女 ねえ、先生。これがあたしの最後の質問。(真剣に)今度はだれが死ぬの？ 梶くんのおかあさんの次はだれの番？

ヤスベ― コウちゃんのおかあさんはまだ死んじやないさ。

出前の女 ごまかさないでよ! (ト、乱暴にヤスベ―から画帖を

奪い、そこに描かれたスケッチを見て) これは!?! ……そうだ

ったの? そういうことだったの? (さめざめ泣き) カワイ

ソー

ヤスベ― (画帖を奪いかえし、スケッチを見て) ああ、松島トモコか。

出前の女 どうして先生? まだそんなにかわいいのに。ねえ、どうして殺しちゃったの!

ヤスベ― ぼくが殺したわけじゃないさ。

出前の女 だって、これ描いてるの、先生でしょ。

ヤスベ― だから、いったじやないか。自分で描こうと思って描けることなんて、ほんのちよつとなんだ。ぼくのしてることなんて……終わってしまった物語を何度も何度も繰り返し描き移す。まるでだれかの日記を書き写すみたいだね。

出前の女　じやあこれはだれの日記？　ねえ、だれの日記なの？

ヤスベ―　ニジツセイキ。

出前の女　ニジツセイキ？　（出前の女はおもむろに下手へ去らんとす）

ヤスベ―　きみ!?

出前の女　（ふりかえり）お酒あるでしょ？　こんなの、悲しくつて飲まなきややってらんないわ。ねえ、先生。今夜はパツとやりましょうよ、パツと！

すると、まるで山びこのように声たちが！

声たち　パツとやりましょうよ、パツと。（出前の女、退場）

ヤスベ―　（声たちを探し、その視線は吸い寄せられるように画帖のスケッチに。読んで）「夏休みも終わり、いよいよ今日から新学期」……（アゴをあげ、彼方を見て）それではここで、恆例の「ミス夏休み」の発表です！

その七　転校生、登場！

マンガが割れると、そこは夏休みがあげたぼくの教室。マンガの世界からまるびだしたぼくが生徒たちとともに歌う。

ヤスベ―はその様子を画帖にスケッチする。

♪　かわいいあの子は　だれでしょか（ツツビ　ツビツバ　だれでしょか）

小さな肩をゆすぶって (ツツビ ツビツバ ゆすぶって)
 エナメルの靴 鳴らしてる
 かわいいあの子は だれでしよか

ヤスベー (スケッチの手をとめ) 発表します! 今年の夏休みの
 栄えある犠牲者に選ばれたのは1

(ドラムのロールが雰囲気をもりあげ) 町はずれのジャブジャブ
 池で見事溺れ死んだ女子の学級委員、松島トモコさん!

生徒たちの歓声と拍手に迎えられ、松島登場。

松島、クチナシの花を挿した1輪ざしを自分の机の上に置
 く。

ぼく 松島!?

松島 (ぼくをふりむき) 梶くん。大事にするからね、これ。(ト、
 胸を示す)

ぼく なんだよ!?

松島 梶くんくれたバッチ。コココーラの王冠の。

ぼく 知らねえよ、そんなの。

ヤスベー きつとあの子だよ。

ぼく え?

ヤスベー あの山のずっとずっと向こうには、緑の野と、小鳥と、
 そして——ぼく もう一人のぼく!?

ヤスベー おたくの町にあの子がやってきたんだ。

ヤスベー、生徒たちと歌う。

♪かわいいあの子は だれでしよか (ツツビ ツビツバ だれで
 しよか)

あかいくちびる とがらせて (ツツビ ツビツバ とがら

せて)

小学唱歌 鳴らしてる

加わいいあの子は だれでしよか

ヤスベー 校庭のユーカリの陰に立っていた見知らぬ顔のふるえる
まつげ。紹介しよう！ 転校生の、じしん！ かみなり！ 梶
コージくんだ！

西郷輝彦『君だけを』の前奏にのって、ぼくによく似たも
う1人のぼくがスポットライトに浮かびあがる。(ぼくと
まったく同じ衣装を身につけたもう1人のぼくを演じる役
者は、クローンかと思まごうほどぼくにウリ二つであるか、
突然変異かと目をそむけたくなるほどぼくに似ても似つか
ないかのどちらかであるべきだ)
同姓同名の転校生であるもう1人のぼくは、『君だけを』
をぼくのために歌う。

♪ いつでも いつでも 君だけを
夢に見ている ぼくなのさ

曲の調子が変わり、もう1人のぼくは生徒たちとともにさ
らに歌う。

♪ じしん かみなり 梶コージ (じしん かみなり 梶コージ)
影絵でしよか 夢でしよか (じしん かみなり 梶コージ)
遠くの町で泣いていた
かわいいあの子は 夢でしよか

歌が終わると同時に始業の鐘が鳴り、担任の藤山教諭が登
場。

ヤスベーは消えていた。

タテガミ 起立ッ！ 礼ッ！ 着席ッ！

一同、着席。死人の松島も自分の席に座る。

もう1人のぼくは黒板の前に藤山教諭と並んで立つ。

藤山教諭は黒板に大きな字で「梶コージ」ともう1人のぼくの名前を書く。

藤山教諭のセリフの間に、もう1人のぼくは生徒たちの一人一人にコココーラの王冠でつくったバッチを配ってまわる。

藤山教諭 梶コージくんはやね、あの山のずっとずっと向こう、そのまたずっとずっと向こうの遠い町からやってきました。というのんも、梶くんはおかあさんを悪性腫瘍で亡くしや、おとうさんも働いていた工場が倒産―シヤレやないで。してから、自分で小さな小さなこんな小さな事業を起こしはったんがこれも失敗、とうとう人間蒸発してもうて梶くんはひとりぼっちになりました。――梶くん。キミ、なにしてんねん。

もう1人のぼく (藤山教諭にも) マ、マ、先生もおひとつ。

藤山教諭 (受け取り) こおら、コココーラ!?

もう1人のぼく バイバイ。わたくし梶コージの今日あるのも、これひとえにコココーラのおかげなのであります。

藤山教諭 コカコーラがどないしてん？

もう1人のぼく もしもぼくがあの日あそこで、あの1本のコココーラを買っていなかったとしたら…… (思い入れの間) ……よしましろう。思い出は無理にむきとらないほうがいいのです。玉ネギをむくようにどこまでむいてもきりがなく、涙ばかりが出て、泣きやんだころには玉ネギはきつとどこかへいってしまおうでしょう。

藤山教諭 (もらい泣きして) ほな、梶くん、きみの席はあすこや。

(ト、松島の席を示す。白いクチナシの花が痛々しい)
もう1人のぼく (藤山教諭にもらい泣きして) 先生、どうしてぼくの席にはクチナシの花が咲いているのですか。

藤山教諭 それは梶くん、死人にクチナシや。シヤレやないで。

もう1人のぼくは涙ながらに自分の席(すなわち、松島の膝の上)に座る。ぼくの眼前に大きな壁がたちはだかる。つまり、ぼくの席は松島の席のすぐ後ろだったのだ。

ぼく (手を上げ) 先生！ 前が見えません。……

藤山教諭 みなさんも知つとると思ひますが、松島トモコさんは、池で溺れ死んで、あの山のずっとずっと向こう……梶くん、なにゆうたん？

ぼく (立ち上がり) 先生の顔がぜんぜん！

もう1人のぼく (ことばをとって) 岡八郎です。

藤山教諭 (岡八郎の普遍的なギャグを) ……プサー—— ……つて。梶くん、なにやらすねん。

教室中がドツと笑いにつつまれる。が、ぼくにはなにがなんだかわからない。岡八郎を知らなかったのだ。

藤山教諭 先生、なに話ししとったんか忘れてもうた。……そやそや。えー、亡くなった松島トモコさんのかわりにいまから女子の学級委員を選びたいと思います。先生、紙配るし。名前一人だけ書きいや。……

ト、紙を配る。

タテガミは家来の生徒たちを集めて円陣を組み、なにやら悪巧み。

藤山教諭 みんな、書いたか？ ……集めんで。

ト、投票用紙を集めてまわる。

松島も自分の投票用紙を手渡そうとするが、受け取ってはもらえない。松島がそこにいることを知っているのはぼくだけなのだ。松島は仕方なく、藤山教諭のズボンのポケットにそっと投票用紙をしのばせる。

藤山教諭 (集め終わった投票用紙を手に黒板の前に立ち) よっし

や。したら、発表や。学級委員タテガミ。読んだって。

タテガミ ハイハイ。先生。(ト、揉み手ですすみでて投票用紙を受け取る。藤山教諭はチョークを持ち黒板を向く) みんな、わかってるよな。いまから選ばれた奴はおれの女房になるんだぜ。

(ト、一人で喜んで) ゲへへ…

藤山教諭 はよ、してくれや。

タテガミ (ニヤリと投票用紙を開き、読み上げようとして蒼白となって) ……

藤山教諭 どないしてん？

タテガミ (読んで) 松島トモコ…

教室に冷たい風が吹き抜ける。

ぼく (照れて) だってよ、やっぱ松島しか考えらんねえよ。

藤山教諭 そら、無効やな。松島トモコさんはもうここにはおらんのや。

ぼく いるじゃん、ここに!! (ト、自分の前の席を示す)

松島 梶くん。いいの。みんなにはわたしは見えないの。

もう1人のぼく (ぼくをふりかえり、ニコツと) オス。

ぼく ……

藤山教諭 タテガミ。はよ次、読んだって。

タテガミ (投票用紙を開き、今度こそニヤリとして) 梶コージ。

ぼく (立ち上がり) なんだよ、タテガミ。

藤山教諭 梶コージくん。一票。(ト、黒板に書く)
ぼく ええエ!?

タテガミ (次から次と投票用紙を開き) 次。梶コージ。これも。

梶コージ。梶コージ。梶コージ……カジコジカジコジ……梶コ

ーシー (黒板が票数の「正」の字で埋まった) 先生。多数決の結果、梶コージくんがぼくの女房になりました!

ぼく きたねえよ、おまえら。(ト、抗議するが、だれにも問題に
されない)

もう1人のぼく (憤然と席を立つとタテガミに歩み寄り、なにを
いうかと思えば) ふつつか者ではございますが(抱きつき)以
後、末長く、愛シテネ。

タテガミ 気持ち悪い気持ち悪い……(ト、身体をひきはなし)こ
いつ、女なんだってよ。(ト、家来の生徒たちとともにバカ笑
いする)

もう1人のぼく (一緒に笑って) こんな女どこにもいないって。

ト、いったものの、こみあげてくる涙を見られまいとする
かのように教室から駆け去る。

タテガミ おい! 逃げるのかよ!

藤山教諭 タテガミ。ええやないか。

タテガミ でも……

藤山教諭 えー、今日から梶くんは女子の学級委員になりました。

タテガミ (あわてふためき) 先生!

藤山教諭 なんや?

タテガミ おれたち……だから、冗談じゃんかよ。

藤山教諭 なにがい?

タテガミ だって。あいつ男だぜ。

藤山教諭 タテガミ!……ええやないか。

タテガミ なにがええねん?

生徒たち アッ!? 大阪弁!?

タテガミ ウルサイ!

藤山教諭 なあ、タテガミ。民主主義に絶望したらあかん。たとい結果がどうあろうとや、梶くんは民主的に選ばれたみなさんの学級委員やんか。(ズボンのポケットに入れた手を出す。その手には松島の投票用紙が握られていた)ン? こんなところにもう一枚……(ト、開いて読んだとたん急に真顔になり、投票用紙を握りつぶすと床に投げ捨て)だれや、これ投票したん?

藤山教諭は静まりかえった教室を見まわす。

松島がそつと手をあげる。が、もちろん藤山教諭には見えない。

ぼくは捨てられた投票用紙を拾い、開いて読んで――

ぼく さよなら、ニジツセイキ……(ぼくは黒板に駆け寄る)

藤山教諭 さあ、手エ上げ。だれがこれ書いたんや。……さあ、だれが手エ上げんねん。見えへんで。先生には見えへんで!

ぼく (黒板に大書して)「さよなら、ニジツセイキ」に一票!

終業の鐘がきこえてくる。

タテガミ 起立ッー 礼ッー (藤山教諭、退場)

藤山教諭は悲しそうに上手に去る。

いれかわりに、バケツをさげたヒゲのこづかいさんが鐘を鳴らしながら登場。それがもう1人のぼくの変装であることとはだれの目にも一目瞭然である。

もう1人のぼく フッフ……あるときはヒゲのこづかいさん。またあるときは女子の学級委員。しかしてその実体は? イテテ:

…(ト、ヒゲをはがし) 梶だア。

タテガミ (無視しきって家来たちに) おい、帰るぞ。(ト、去ろうとしてもう1人のぼくに) 授業中に勝手に教室出るなんてよ、おまえそれでも学級委員?

もう1人のぼく ちよつとき、校長室へ就任のアイサツ行つたんだ。えー、みなさん。ぼくさ、学級委員としてさ、今日から放課後一時間だけこづかいさんのアルバイトをすることになりました。タテガミ チェッ!?

もう1人のぼく もちろん、みんなのためさ。

タテガミ だれもたのんでねえよ。

もう1人のぼく でも、そのかわりにさ、校長先生がさ、秋の運動会の公式飲料として(ト、バケツから取りだしたコココーラの壺を掲げ) コカコーラを認めてくれたんだ!

生徒たち (驚き、呆然と) やったア!?

もう1人のぼくは、おいしそうにコココーラを一气飲みます。

生徒1 じやさ、学校にコーラ持ってきててもいいの!?

もう1人のぼく (壺を示し) もう持ってきてるじやん。

生徒2 学校でコココーラ飲んでもいいんだ!?

もう1人のぼく 飲んでるじやん。

生徒たち やったアー (ト、歓声を上げる)

タテガミ おれは認めないぜ。もし認めてほしきやおれと勝負しろ、梶!

ト、自分のカバンからなんとホームサイズのコココーラを二本取りだし、一本をもう1人のぼくにつきつける。
もう1人のぼくは、それを受け取ると不敵に笑い―

もう1人のぼく タテガミくん。きみの負けだ!

ト、さらにバケツからレギュラー・サイズを一本取りだし、両手に持った二本のコーラ壺を構える。それはまるで宮本武蔵。

生徒たち ア!?! 二刀流ッ!?

タテガミ おまえ、宮本タケゾーのつもり?

もう1人のぼく 宮本タケゾーは大人になってムサシになって、そして、戦争でバラバラになった大人のココロをひとつにするため、苦勞して近代オリンピックピックを始めたんだ。

タテガミ オリンピックウ?

もう1人のぼく その様子を後世に書きのこしたのが、宮本武蔵の五輪の書です。知らなかったろ。タテガミくん。

タテガミ ウーム。

もう1人のぼく そして、コカコーラは、そのオリンピックの公式清涼飲料なのです。

タテガミ なんでもいいから、勝負だ!?

生徒たち セーノオ——

決闘が始まる。

もう1人のぼくは一気飲みでレギュラーサイズを空にする。

生徒たち 梶くん、一本クリアー!

勝負は圧倒的にもう1人のぼくの優勢のうちにすすむ。

生徒たちは歓声をあげ、はやしたてる。

ヤスベー、いつからか教室の片隅で影のように机にもたれ、画帖にスケッチをしていた。

ぼくは生徒たちの輪にはいることもできず、ふと松島をふりかえる。

ヤスベー（画帖から顔を上げ）松島はまだそこに座っていました。そこは、夏休みのはじまる前まではたしかに松島の席だったのです。でも、いまは……

松島 梶くん、おぼえてる？ わたしたち、一年生からずっと同じクラスなのに、口をきいたのはたった1度きりだったわ。

ぼく 去年の秋だろ。

松島 うちの庭の柿の木の下で、ね、わたし落ち葉を集めてたき火しようとしてたの。

ぼく おまえ、こわそうにマッチすってんだもん。そんなに長い指のくせにさ。おかしくって、ぼく……気にいっちまったぜ。

松島 わたしが気がついたら、梶くん、言ったのよね。

ぼく 「あの……柿をとらせてください」

松島 「はい。……どうぞ」

ぼく あれだけだったな。

松島 一度きりだったわ。

ぼく おまえ、いまでもあんなふうマッチするの？

松島 シュツとマッチをするでしょ。そのときだけポツと夜が明るくなるの。そのときだけでいいから、わたしのこと、思い出してね。梶くん。

ふたたび生徒たちの歓声――

生徒たち 梶くんの勝ちイッー

もう1人のぼくは見事に二本のコカコーラ壺を空にしていた。タテガミはまだ一本の三分の一を残しているのに、である。

タテガミ 梶。おまえ、野球できる？

もう1人のぼく え？

タテガミ おれのチームに入れよ。

もう1人のぼく でも、いいのかい。ぼく、四番でサードしかできないよ。

タテガミ よし！ みんな、行こうぜ！

生徒たち オオウツー

タテガミはもう1人のぼくと肩を組み、生徒たちとともに退場。

ひとりでうずくまるぼくと、傍らでじっとそれを見守る松島。

ヤスベーは、マンガの世界を抜けだし仕事机にもどった。

ぼくが何気なく上手をふりかえると、消えたはずのもう1人のぼくが袖からジツとぼくを見つめていた。

もう1人のぼくはぼくに歩み寄り、ニヤリと笑う。

ヤスベー もうひとりのぼくはニヤリと笑うと、黙ってぼくを見つ

めていました。……オリンピックまであと四十日。放課後の教

室にはまだ名残りを惜しむような蝉の声があふれて……でも、

コウちゃんの夏はとづくに終わっていたのです。

ぼくたちの背後に追憶の幕（紗幕）がおりる。

その八 淋しい星

原っぱ。（紗幕前）

二人のぼく、そしてこの世のものならぬ松島は、スマイレ色に暮れてゆく空をながめている。

下手の机でも、ヤスベーが仕事の手をとめ彼方を見上げて

いる。

ぼく (天を指さし) あれ!? 一番星。

松島 なんだか、淋しそうなお星様ね。

ヤスベー あれは、地球です。いまぼくたちがお話を交わしているところの遊星なのです。

もう1人のぼく 双眼鏡持ってくればよかったなあ。アメリカが見えたかもしれない。

ぼく うん。デイズニーランドもね。

二人のぼくは互いに互いを見つめあう。

もう1人のぼく 驚いちゃった。きみ、ぼくにソックリなんだもの。ぼく やだな。ぼく、ひとから見たらきみみたいに見えるのかな。

もう1人のぼく そういうもんさ。

ぼく ねえ、きみだよ。田手上に挑戦状出したのも。おかあさんに手紙書いたのも。

もう1人のぼく (笑って答えず) ぼくはさ、背が高いうえにスマートで、髪はしなやかなうえにブロンドでしょ?

ぼく え!?

もう1人のぼく たとえばですよ。

ぼく たとえばですか。

もう1人のぼく それでさ、スポーツなんでもこいだし、いつも学級委員には選ばれるし、成績はオール五だし、放課後はこづかいさんでしょ?

ぼく 歌もうまいじゃん。

もう1人のぼく アア、西郷輝彦ね。今度校長先生にたのまれました、生徒総会で『お座敷小唄』歌うんです。……ぼく、自信家ですか?

ぼく そうですねえ。

もう1人のぼく でも、ほんとみんなが思うほどぼくには自信な

んかないんだよ。

ぼく やめてくださいよ。

もう1人のぼく ときどきなんだかわからないものが怖くなるんだ。

松島 (星を見つづけていて) ほんとに淋しそうなお星様。

もう1人のぼくは松島を見る。

ヤスベー 淋しくなんかないさ。あのちっぽけな遊星だって、きつ
といつか、救われないはずはないのだから。

ぼく (もう1人のぼくに) 見えるんだね、きみにも。……松島の
こと。

もう1人のぼく うん。

松島 あたし、そろそろ行かなくっちゃ。

紗幕の裏を大人たちに担がれたちっぽけな柩が通る。

三人はその葬列をふりかえり、だまってながめる。

ヤスベー 松島トモコのちっぽけな柩は、彼女がとうとう一度も遊
ぶことのなかった原っぱを横切り、待ちかまえている霊柩車へ
と運ばれてゆきました。それは、その夏きいたどのラジオ番組
よりもおもしろく、どの映画よりも胸踊る見世物でした。その
原っぱ全部をオモチャみたいに家に持って帰って遊びたい。コ
ウちゃんはそう思いました。そこにあつたもの全部を、原っぱ
の形をした緑色の箱のなかに実物そっくりに配置して、ボール
紙でつくった大人の肩にマッチ箱の柩をのせ、そのなかには、
松島トモコのかわりにグリコのおまけのお人形さんでも入れて
やろう。

葬列、通り過ぎた。

松島 わたしね、自分が肺炎で死ぬんじゃないかと思っていたの。それだけは絶対いやだって思っていたの。

もう1人のぼく じゃあ、よかったね、池で溺れて。

松島 肺炎で死ぬのはきつと部屋にだれもいないときなんだって、そう思っていたの。助けてって叫んでもだれもいなくて、だれかが来たときにはもう死んでるの。だからわたし、もし自分が肺炎になったら、だれでもいいからわたしの指と指どうしを長い糸で結んでおこう。そうすれば、わたしが死にそうになったとき糸を引けば、部屋にいなくてももどってきってくれる。糸と糸で結ばれていけば、ひとりで死ななくてすむ。そう思ったの。

ぼく 松島……

上手から喪章の男、登場。松島トモコの父だ。松島の父にはもちろん松島の姿は見えない。

松島の父 (ぼくに) トモコのお友達ですか。

もう1人のぼく (ぼくにかわって) ア、はい。死んでからですけど。

松島の父 一緒にいらっしやいませんか。あなたたちだけなんですよ、子供で来てくれたのは。

もう1人のぼく 松島さんて、全然友達いないんですかり：

松島の父 トモコは体が弱くてね、しょっちゅう風邪ばかりひいてたんです。だから、いつも部屋のなかでひとりで遊んでました、ハイ。

松島 一度でいいからカンけり、したかったなあ。

ぼく すりやよかったじゃん。

松島 だって、おとうさん、表で遊んじゃダメだって。

ぼく そうやって大人はいつも子供の邪魔をするんだよな。

松島の父 (ぼくに) は？

もう1人のぼく もちろん、子供がしたくないことをしているとき

は別ですけどね。

松島 いやいやなにかをしていると、大人は死ぬまで同じことをさせようとするのよね。

ぼく おまえはさ、死ぬまでなにさせられてたの？

松島の父 トモコは学級委員してたんですよね。なにもできない学級委員ですまなかったですね。

もう1人のぼく いいんですよ、だれも期待してませんでしたから。松島の父 はあ？

もう1人のぼく 松島さんの場合もどうせタテガミが冗談で選んだんでしようねえ。

松島の父 トモコは冗談で選ばれたんですか。

松島 それでも、わたしはうれしかったわ。

松島の父 (ギョツとしてあたりを見まわし) ……きこえませんでしたか!?

もう1人のぼく え？

松島の父 いまトモコの声がきこえたんです！ わたしはうれしかったわ……って。

ぼく (怒りで顔を真っ赤にして) うれしいわけじゃないじゃないかッ！カンけりも手つなぎ鬼も水雷艦長もなんにもしたことなくてさ、肺炎だけは絶対にいやだなんていって、でも、肺炎というのは肺のなかに水がゆつくりたまって溺れちゃうんじゃないか。自分のなかで溺れるかわりに、松島は池で溺れちゃって、助けてっていつでもだれもいなくて、だれかが来たときにはもう死んでたんじゃないか。そのどろろがうれしんだッ！ (松島が、名残りを惜しむように手をふり上手に消える) ——松島!? 行くなッ！

ト、後を追おうとする。その行く手に柩を担いだ大人たちが現れ、ぼくの前に立ちふさがる。

松島の父 一緒に来てくれますね。

ぼく ……ぼく、いいです。

松島の父 (声をあげて号泣し) ……

もう1人のぼく それじゃあ、まあ、私が代表して。

松島の父 ありがとうございます。

もう1人のぼく (松島の父の肩をポンポンたたき) おとうさんも

そんなに気をおとさず。パーツといきましょう、パーツ。(

葬列に) さあ、行くぞ! 出発! ローレンローレンローレン

……

ト、勝手に一人で去る。

松島の父 (もう1人のぼくの後ろ姿に) 元気でいい。ですねえ…

…(ぼくをふりかえり) そのうち家に遊びにきてくれませんか。

二丁目のなんでも屋です。

ぼく 知ってます。

松島の父 今度コココーラはじめたんですよ。飲みたかったらいつ

でもどうぞ。

ぼく コカコーラ?

ヤスベー そのコココーラが忘れられない思い出のコカコーラにな

ることなど、知るはずありませんでした。…:コウちゃんは

永遠について考えていました。永遠というのはどれくらい永い

のだろう。少なくとも次のクリスマスよりは永いにちがいない。

そんなことをです。だって、松島は永遠にいつてしまうのです

から。

ぼくは松島の父にうながされ、柩に最後の別れをした。

松島の父は葬列を先導して上手に去らんとする。

ぼくは、ふと指にからみついた糸に気づく。ピンと張ると、

糸の先は柩のなかへ消えていた。

ぼく 待ってください！

大人たちは立ちどまり、ぼくを不思議そうにふりかえる。大人には糸は見えないのだ。

ぼくは、ゆつくりと糸をたぐる。すると!? 柩の蓋がうすく開き、なかから長く細い指に糸をまきつかせた白い手が現れ、ぼくにサヨナラする。

ヤスベー あんなに長い指で、松島は怖そうにマッチをすっていたっけなあ。……涙は、うすむらさきに暮れてゆくあたりの景色をにじませ、去年の秋にすったマッチほどのあたたかさで、つめたい少年の胸にしみてひろがりました。

プツンと糸が切れ、柩の蓋が閉る。柩をかついで、葬列は上手に消える。

ぼく (上手に) 松島トモコ行くゼーッ、オウッ！

ぼくは柩を追って駆け出す。いれかわりに、上手からムジナ出版の田手上がハンカチで手をふきながらやってくる。

その九 終末嗜好症

ヤスベーの仕事部屋。

ヤスベーはペンを握ったまま、もの思いにしずんでいる。トイレからもどったらしい田手上が――

田手上 イヤー、ウンコの切れが悪くって……（ヤスベーの机の脇のソバを発見し）あれ!? 来てるじゃない、ソバ。先生先生、食いましよう、ソバ。（ト、ソバを取ろうとしてヤスベーのコート姿に気づき）……先生、その格好は？ どっか出かけるのですか？

ヤスベー （独り言のように）松島はあれでよかったんだろうか。

……

田手上 マツシマ？

ヤスベー ねえ、田手上くん。もしかしたら、ぼくさ、ほんとはマングァのこと――

下手から一升瓶と茶わんを持った出前の女、すっかりできあがって鼻唄まじりに登場。

出前の女は、さきほどまでと同じ出前の女でありながらもまったく別人のもう一人の出前の女、すなわち出前の女2である。

出前の女2はぼくの母によく似ている。

出前の女2 金のないやつあ 俺んどこへ来い 俺もないけど心配すんな……とね。（ト、床にあぐらをかいて座り、手酌で茶わん酒）

田手上 先生、お友達ですか？

ヤスベー だから、ホラ、ソバ屋さんだよ……って、ええ!? （ト、まじまじ出前の女2の顔を見て）きみ、さっきのソバ屋さん？ 人がかわったね、ずいぶん。

出前の女2 思いつきし泣いたらお化粧全部おちちゃった。（鼻にかけ）先生。素颜でごめんなさい。（田手上に気づき）あら、こちらは？

ヤスベー 編集者の人さ。（ヤスベーは仕事にもどる）

出前の女2 (臭い息で田手上に耳打ちして) ここだけの話、あたしね、こちらの先生のマンガ全部読んてる。(急に大声で) ほんとよ、ほんと。(急に声ひそめ) でも、ひとにいつちやダメ。そんなこと知られたら変人扱いでソバ屋くびだもん。わかる？ あんた。いまだきマンガ読んでるってことはね、それくらい危険な冒険なんだ。(ト、茶わんをさしだし) ま、一杯。

田手上 こりやどうも。(ト、出前の女2と二人して床にあぐらをかく)

出前の女2 (酒を注ぎながら) で、あんた、ながいの？ 編集者って。

田手上 イヤー……(ト、酒を一気に飲みほす)

出前の女2 (すぐに二杯目を注ぎながら) よかったよねえ、昔はマンガも。なんにも考えないでバカやってさ。

田手上 イヤー……(ト、ふたたび一気飲み)

出前の女2 (三杯目を注ぎながら) ま、結局、ベルリンの壁の崩壊ね。あれからよ、あれから。あたしはこういつてんだけどね、壁と一緒にマンガも終わったんだって。

田手上 (三杯目を飲みほしたとたん、いきなり豹変し) 勝手に終わりにすんなッ！

出前の女2 (二遍に酔いもさめ、林家三平の) ドーモすいません。でも、まあその、終わったものは終わったわけで……

田手上 (ラッパ飲みに一升瓶を飲みほし) じゃあ、いまここでマンガ描いてるあのお方はなんなんだ！

ヤスベー (手をやすめ) 終末嗜好症……とでもいうのかな。子供の頃さ、引越す家がすぐくうらやましかったなあ。垣根の外からのぞいてみると、家がどんどんかたづけられて、最後にはなにもない静かな一刻がやってくるんだ。たとえば、白い雲が群がる夏休みも、それが始まるうとする一学期の最後の日の素晴らしさには到底およばない。そんなことなかった？ ぼくさ、そうやっていつも、なにかの終わりを待っていたのかも

しれない。

田手上 そういや先生、いつも終わりから描きはじめるですもんね、マンガ。

出前の女2 描きたいのは終わりだけでさ、途中は全部でっちあげだもんね。

田手上 いいすぎだったの。

出前の女2 (いきなりワアツと泣きだし) でもあたしはね、それじゃあんまし死んでく人間がカワイソーだって言うんですよ。

(ト、立ち上がり) ええ? 先生。そりゃ松島の場合ね、あれはやく死んでよかったなって思うの。だって、あの顔で小学生はつらいわよ。(ト、ヤスベーに近寄り) でも、コウちゃんのおかあさんは! (原稿をのぞき) ややっぱし殺しちまいやがったツ!? どうしてだよ。どうしてコウちゃんのおかあさん、殺しちまうんだ。ええ? ちよっとくらい歯がでてるからって殺すことはないだろ。(ト、つかみかかる)

田手上 (はがいじめにひきはなし) これはマンガよ、マンガ……

出前の女2 はなせ、このヤロー! (ト、手をふりはらい、上手へ去らんとす)

田手上 オイ!

出前の女2 (怖い顔でふりかえり) 酒買ってくる。

ト、上手に去る。

田手上 オーイ。この時間だと駅の向こうのローソンだぞ!

ヤスベー 田手上くん……

田手上 (ヤスベーをふりかえり) ……?

ヤスベー きみ、飲んだことある? ヌルくなったコカコーラって……

田手上 (懇願して) 先生。これ以上私に飲ませんでください。

ヤスベー コカコーラ飲んで悲しくなったことは?

田手上 そりやまあ、彼女にふられたときとかなら悲しくもなるけど、でも、そんなときはミルクセーキ飲んでも悲しくなるしな。ヤスベ― 悲しいのはコココーラのせいじゃなかったの？

田手上 こだわりますね、コココーラに。あれじゃだめです？ ドクターペッパ―じゃ。

ヤスベ― ……もういいんだ、（ト、ふたたびペンを執る）

田手上 まだやるですか？ 仕事。

ヤスベ― あと1ト月で終わるから。

田手上 一ト月!? ……（原稿をのぞき、読んで）「オリピックまであと三十日」かあ。

五輪音頭とともに追憶の幕が開く。（紗幕がとぶ）

その十 正義の勝利

母の病室。

中央のベッドに母。手術のため髪を剃り、ツルツ禿だ。

ベッドの上手に二人のぼく。下手では父が医師となにやら話している。ベッドの後ろには看護婦が待機している。

上手袖寄りにポツンと乳母車。布がかぶせられ、木の枝が一本立っている。その木の枝には、乳母車の所有者を示すかのように、もう1人のぼくの似顔絵の描かれた旗がひるがえる。

仕事机では、ペンをはしらせるヤスベ―と、それを見まもる田手上。

母 あら？ いい匂い。香水？ ……（もう1人のぼくが照れくさそうに母に近寄る。目の見えない母は手探りにもう1人のぼくの手を握り）コウちゃん。あなた、体になにつけてるの？

もう1人のぼく ヘリオトロープです。

母 (手をはなし) どなた? ヘリオさん?

もう1人のぼく いえ、ヘリオトロープです。

母 (父に) あなた! ヘリオさんがロープ持ってきたわよ!

父 バカ。こぢらはおまえ、コージの友人の梶コージくん。(次にぼくの手を母に握らせ) こちらが家の梶コージくん。(さらに足元のダンボールを) そいからこちらが、灰皿だ。

母 なんです? 灰皿って。

父 おまえ、煙草吸いたくないか。

医師 (いさめて) 梶さん。手術の前ですから。

父 でも先生、最後の1服っていうでしょ。

医師 バカいうんじゃない!

父 じゃ、形だけ。(ト、見えない煙草を母の指にはさんでやり) ほら、吸ってみな。

母 (見えない煙をプウと吹いて) おいしい……

父 え? なに? 灰皿? しょーがねえなあ、病人だと思って人こきつかってよ。(ト、だれもたのんでもいないのにダンボールから灰皿を出し、得意気に母の手に) へへ。ほらよ。灰皿だ。

母 (形を指でなぞって) なんです、これ? おもしろい形。

父 だからよ、おまえ、これはな、東京タワー舞子さん付き灰皿だな。へへ。これが売れるんだ、オリッピックだよ。外人さん、好きなんだってな、こういうの。ガッポガッポだぜ。なあ、コージ。

ぼく どこで買った、これ?

父 バカ。買ったんじゃない。おとうさんが貯金はたいてつくらしただ。デザインもおとうさんだ。この舞子さんのモデルはおかあさんだ。売れるぜ、こいつは。手術代の心配なんかして損しちまった。ねえ、先生。

医師 梶さん。そろそろ時間ですから。

父 ……そうですか。(母に) なあヨキコ、おまえ、一九五〇年て

覚えてるか？

母 ええ。あたしたちがああの盆踊りで出逢った年でしょ？

父 バカ。国鉄スワローズができた年だ。それ以来ずっと応援してんだからよ、そろそろいい夢見さしてほしいよな。

看護婦 行きましょ、梶さん。(ト、母を寝かせ医師とともにベッドを押しして下手へ)

父 大丈夫。今年はきつと国鉄優勝するからよ。

もう1人のぼく (母にエールをおくって) ローレンローレンローレン……

母は連れ去られた。

ぼくは一刻も早くその場を立ち去りたい思いで一杯だった。

父 (ぼくを見て) なに黙って突っ立ってんだ。透明人間じゃないんだろ？ ええ？ かあさんになんかいたいことなかったのか、コージ……十円持ってないか。

ぼく ない。

父 (ガックリと) そうか。

もう1人のぼく ぼく、あります。(ト、ポケットを探る)

父 いや、いいのいいの。

もう1人のぼく (十円玉をさしだし) どうぞ。

父 ……

もう1人のぼく どうぞ。

父 (ぼくに) ちょうど手持ちが二十五円しかなくてさ。手術終わったらかあさんにコカコーラ飲ましてやろうかと思っただけんど。なあ、コージ、コカコーラって三十五円でよかったよな。

ぼく ……

父 (もう1人のぼくに。ペコペコと) すいませんねえ。

ぼく (蚊の鳴くように) おとうさん、イヤだ。

父 え？

父はもう1人のぼくの掌から十円玉を取ると、ダンボール箱をかかえ逃げるように去る。

もう1人のぼく 梶くん。どうする？

ぼく ……

もう1人のぼく 表で待ってようか。

ぼく うん。

ぼくと乳母車を押したもう1人のぼくは、グルリと舞台を一周する。

同時に、上手から藤山教諭が生徒たちを従え、笛を吹いて走ってくる。

藤山教諭 ヨオ。梶くん。

もう1人のぼく ヨオ。先生。なんです？ オリンピックにでも出るんですか？

藤山教諭 そうなんや。

もう1人のぼく ええ!?

藤山教諭 タテガミ、選ばれてな、小学生の聖火リレー出ることなってる。それで練習つきあってんねん。

もう1人のぼく でも、タテガミくんは？

藤山教諭 (後ろをふりかえり) あれ？ おかしなア。タテガミ。
(ト、探し) タテガミ！

一同、タテガミの名を呼びながら場を探しまわる。

仕事机でヤスベーの手もとをのぞきこんでいた田手上――

田手上 先生先生。私ね、小学校時代タテガミってあだ名、タテガミって。わかります？ 走るの全然だめだったです。

藤山教諭 （彼方に） なアーンやタテガミ。そこにおったんかいな。

田手上 （彼方からの声に） ええ？

藤山教諭 タテガミ。なにしてんねん。……オリンピック終わって
まうで。

田手上、声を探して中央へ来た。

生徒たち、マンガの世界からヤスベーの仕事部屋に乱入し、
強引に田手上を担ぎあげる。

田手上 ウワアッ!? 先生ーッ！ （田手上はマンガの世界にひき

ずりこまれた）

ヤスベー （悲鳴に気づき）田手上くん!? （ト、中央へ）

マンガの世界の登場人物たち——藤山教諭と生徒たち、ぼくの父と母、松島とその父、医師と看護婦が壁のように立ち
ちはだかり、田手上の姿をのみこむ。二人のぼくの姿はな
い。

藤山教諭 （彼方のヤスベーに） あんたやね。子供拐かしてはチン

チンちよん切るおじさんて。

ヤスベー （彼方に答えて） はい。ぼくはヒトサライです。

藤山教諭 あんた、子供好き。なんか？ ほんとは好きちがうやろ。
ヤスベー わかりません。

松島 恋愛とは他人のなかへ潜りこもうとする傾向だが、芸術とは
自分のなかへ潜りこもうとする傾向である。

ヤスベー ボードレールですね。

母 あんた、なんか勘違いしてんじやない？

藤山教諭 マンガは芸術とはちがうで。マンガは恋愛や。

ヤスベー 少女マンガ、恋愛ですか？

藤山教諭 （一同に） オリンピックまであと三十日や！ さあ行く

ぞ！ 出発！ ローレンローレンローレン……

ト、下手に去る。

後には衣装まですっかりタテガミになった田手上が残る。

ヤスベー 田手上くん！

田手上／タテガミ（一瞬彼方を見やるが、すぐに）ローレンロー

レン……（ト、去る）

ヤスベーはマンガの世界にとびこみ、田手上の後を追って去る。

上手からぼくと乳母車を押したもう1人のぼくが歩いてくる。

もう1人のぼく もうすぐですね、オリンピック。

ぼく（立ちどまり）ねえ、梶くん。ぼくの話ききますか。

もう1人のぼく きいてもいいですけどねえ。

ぼく ぼくさ、きつといつかおたくにとつてもひどいことする。

もう1人のぼく フーン。

ぼく ……怖いんだよ。

もう1人のぼく ぼくにもさ、なんだか怖いものがあるんだけど、それがなんだかわからない。変な気分。いつも気にかかっている。

何回か正体がかめそうなきもあつたんだけど、いつももうちょっとつていうところで逃げられちゃう。……きのうもさ、

そいつが夢に出てきた。

ぼく 夢ですかあ。

もう1人のぼく いけませんかあ。

ぼく（独白） どうしてみんな夢の話ばつかするんだ。

もう1人のぼく 今週はずつとそいつの夢ばかり見る。でも、もうちょっとで見えるところで消えちゃって目が覚める。いやな気

分ですよお。一度でいいから正体見たいなあ。一度でいいから。ぼく、そのうち見えますよ。

もう1人のぼく、そうだといいんですけどねえ。

ぼく、梶くん。

もう1人のぼく、なアに、梶くん。

ぼく、おたく、よく夢の話をする？ だから、友達なんかに。

もう1人のぼく、したことないですねえ。

ぼく、友達たくさんいるのにねえ。

もう1人のぼく、ひとの見た夢の話くらいつままないもんじゃないですからねえ。

ぼく、ぼくに梶くんみたいに友達がいたら自分の夢は全部話す。そ

う思う。でも、ぼくの夢は退屈だから、だから友達ができない。

そう思う。

もう1人のぼく、……

ぼく、ぼくさ、いろんな人に親切にしようって誓った。特に子供には。

もう1人のぼく、いいんじゃないですか。

ぼく、一人でもいいから友達つくって、ぼくのお葬式には絶対出て

もらう。葬式に友達が一人も来ないなんて、そんな死に方や
ですからねえ。

もう1人のぼく、夢は見る方？

ぼく、きのうも見た。

もう1人のぼく、どんな夢？

ぼく、三船敏郎の夢。

もう1人のぼく、そいでどうした？

ぼく、そいだけ。三船敏郎が映画と同じように出てくるだけ。

もう1人のぼく、梶くんはさ、夢のなかにいた？

ぼく、いませんねえ。透明人間ですねえ。

もう1人のぼく、ぼくはさ、自分の夢のなかに出てくる。

ぼく、ぼくは映画みたいに見てるだけ。ぼくも出たいんだけど、座

席から動けない。じっと座って見てなきやなんない。映画ならオセンべくらいあればいいんですけどねえ。

もう1人のぼく コカコーラとね？

ぼく まだ飲んだことないんですよ。

もう1人のぼく そうですか。

ぼく ぼくさ、おかあさんに子供が生まれると思ってた。

もう1人のぼく 妹？

ぼく うん。妹。

もう1人のぼく ヒミツ教えましょうか。

ぼく ヒミツですか？

もう1人のぼく ぼくさ、おかあさんはアクセーシューで死んだし、おとうさんは小さい小さいこんなに小さい事業に失敗して

人間蒸発でしょ？

ぼく それがヒミツですか？

もう1人のぼく ぼくさ、そのうち自家用車買おうと思って。

ぼく でも、おたくまだ小学生だぜ。

もう1人のぼく だからさ、運転手付き。

ぼく ずいぶんちがいますねえ、東京タワー舞子さん付きと。

もう1人のぼく まあね。

ぼく こづかいさんのアルバイトつてすごいですねえ。

もう1人のぼく あれはボランティアですよ。

ぼく そうですか。

もう1人のぼく 目的はこれですよ。

ト、乳母車にかかっていた布を取り去る。そこには山のよ

うなコカコーラの空壇。

ぼく ……？

もう1人のぼく 壇代十円。

ぼく ……？

もう1人のぼく 壘代一本十円。

ぼく (ようやく理解して) すげー!?

もう1人のぼく ぼく、こづかいさんでしょ? ぼくが処分するか

わりに毎日タダでもらってる。職員室の机の下は宝の山だよ。

(空場を一本さしだし) 一本どうぞ。

ぼく いいですよ。

もう1人のぼく そのかし、職員室はぼくの縄張り。(ト、渡す)

ぼく (受け取った壘の中をのぞいて) ……ア、やもり!?

もう1人のぼく え? (ト、のぞいて) ……ほんとだ!? やもり

ですねえ。

ぼく なにしてんでしようねえ。

もう1人のぼく ずいぶんデカイですねえ。

ぼく なに食べてんでしようねえ。

もう1人のぼく (腋の下から腋毛を抜き壘に入れる真似で、やも

りに) レッドースネーク、カモン。

ぼく 東京コミックショーですね。

もう1人のぼく 出てきませんねえ。

ぼく あれは蛇ですからねえ。

もう1人のぼく 出られないんだ!? なかでデカくなりすぎちゃつて。

ぼく こいつ、高度成長ですね。、

もう1人のぼく このままじゃ死んじやいますねえ。

ぼく どうして?

もう1人のぼく なんでも。死んじやいますねえ。

ぼく 死なないよ。

もう1人のぼく 死んじやうよ。

ぼく 死なない。

もう1人のぼく 死にます。

ぼく 死なないんだ!

ト、思い切りもう1人のぼくを突きとばす。
もう1人のぼくは地面にころがる。

間。もう1人のぼくは、黙って起き上がり服の泥をはらっている。

もう1人のぼく …… 梶くん。きみ、ケンカつよい？ いままでだれかに殴られたことって、ある？ 家でぶたれたことは？ おとうさん、ぶつたりしない？

ぼく すげーよ。うちのおとうさんのパンチ。

もう1人のぼく いいなあ。ぼくはさ、一度もない。だからわからないんだ、ぶたれるってどんな感じか。経験したくて、よく自分でぶつてみるんだけど…… 怖い？ ぶたれるときって。（乳母車の旗を取り）たとえばこんな枝なんかで。（ト、枝を鞭のようにふりまわし）ウン。けっこうしなるわ。

ぼく 血がでるね。

もう1人のぼく ぶつてみたくない？ これで。

ぼく だれを。

もう1人のぼく ぼくを。

ぼく 変なこと、いうなよ。

もう1人のぼく 変かな。

ぼく ぶたないよ。

もう1人のぼく ぶつてもいいっていつでも？

ぼく ぶたないよ。

もう1人のぼく ぶつてくださいってお願いしても？

ぼく どうかしてるよ。

もう1人のぼく だってぼく、一度もぶたれたことないんだ！

ぼく そんなのひとにたのむなよ。

もう1人のぼく お願い。…… お願い。

ぼく じゃあ、そんなお願いできないようにしてやるよ。

ト、枝を取り、もう1人のぼくの尻をチョンと打つ。

もう1人のぼく なんともないよ。

ぼく 服の上からだもん。

もう1人のぼく じゃ、足ぶって！

ト、半ズボンから剥きだしの足をだす。

ぼくはその足を打つ。

もう1人のぼく なでたみたい。ねえ、なでたみたいだよ。

ぼく ……チクシヨー！

ト、枝を投げ捨て、拳でもう1人のぼくの顔を殴る。

ふたたび地面に倒れたもう1人のぼくの上にぼくは馬乗りになり、もみあいながらさらに殴る。何度も何度も……下敷きになったもう1人のぼくのパンチがぼくに命中し、ぼくはあつけなく地面をころがる。

もう1人のぼく (泥だらけになって起き上がり) こんなんじやないよ。……こんなんじやないんだ！

ト、上手へ駆け去る。

いれかわりに父が真っ青な顔をして冷汗たらしながらやってくる。

ぼく (ギョツとして) おかあさん……死んじやったの!?

父 いや、手術が長引いてさ、まだ当分かかるらしいや。——コー

ジ、おまえ、十円持っていないか？

ぼく ないっていったじやないか。

父 ウン。わかってる。もしかしたらと思って。

ぼく おかあさんのコカコーラは？

父 なんだ？

ぼく 手術終わったら飲ませるんだって。

父 バカ。手術の後にそんなもん飲めるか。

ぼく さっきのお金？ パチンコやったな!?

父 だって、おまえ、まだ当分かかるっていうし……

ぼく 負けるってわかってるのに。

父 (首をたれ) すまない。

ぼく おとうさん……

父 (置き忘れられた乳母車に気づき) ……？

ぼく (背中に隠して) これはダメだよ。

父 なんだ？

ぼく 梶君のだから。

父 (空壇の山を見て) どうすんだ、これ、こんなに。

く 壇代一本十円。

父 (乳母車に手をかけ) そうか。壇代一本十円かあ。……

ぼくの頭に、黄昏の町を乳母車を押して走り去る父、もう一人のぼくの前で地面に土下座して許しを乞う父……の姿が浮かぶ。

ぼく おとうさん、イヤだあ！ ドロボウしちゃイヤだあ！

父 ……バカッ！ (ト、手をふりあげる)

ぼく ぶつてもいいよ。お願い。ぼくをぶつて！

父はぼくを殴ることができなかった。父はふりあげた手を
おろしジツとそれを見つめて……

父 (不意に) あれ!? 箱は? ダンボール箱。東京タワー舞子さ
ん付き……し、しまったッ!? パチンコ屋に忘れてきちゃった

!? (ト、血相かえて駆け去る)
ぼく (独白) おとうさん。……ガンバツテ。

いつからか下手にヤスベーが立っていた。

ヤスベー コウちゃん。

ぼく おじさん。(ト、胸にすがり、泣きながら) わからないんだよ。ぼく、人間なんて変な生き物に生まれたくなかった。鉄か岩かトタン板か、死ななくてもすむ物になりたい。どうせ死んじゃうなら、はじめから生まれてこなけりゃいいんだ。

ヤスベー ……コウちゃん。

ぼく どんどんわからなくなる。大人になったらもつとわからなくなると思う。わかっているのは、きつといつか、だれかにとってもひどいことする。それだけ。

ヤスベー (やさしくぼくの頭を胸に抱きしめ) きこえるかい、コウちゃん。

ぼく (顔をはなし、ヤスベーを見て) ……?

ヤスベー イタリアの物語の主人公は恋人の胸のなかに海の響きをききました。きみはコウちゃん、なにがきこえる?

ぼく (ふたたびヤスベーの胸に耳をつけ) ……ロケットだ!?

ヤスベー え?

ぼく 宇宙ロケットだよ。(ドキツとして) おじさんの心臓、ぼくと反対側にある……

ヤスベー そ、それは、ホラ、床屋さんの鏡のなかでは時計の針は反対にまわるだろ?

ぼく どういうこと?

ヤスベー だから、つまり、何万人に一人かはこういうおじさんもいるってことさ。

ぼく 何万分の一かあ。国鉄スワローズが優勝するようなもんだね。

アア、優勝しねえかな、国鉄。

ヤスベー 可能性はないけど、でも、絶対なんてないと思う。
ぼく ムリだよ、絶対。もし国鉄が優勝するくらいなら、ぼくが聖
火リレーのランナーやってるよ。

タテガミを先頭に、藤山教諭と生徒たちが走ってきた。
いつの間にかヤスベーの仕事机に出前の女が座り、ニュー
ボトルの一升瓶をラッパ飲みしながら原稿を読んでいた。
今度の出前の女はもう1人のぼくによく似た出前の女3で
ある。

出前の女3 (ペンを執り) ボキッ! ……ときたね。

ト、原稿に勝手に手を加えたとたん、いきなりタテガミが
ドドウとこける。

藤山教諭 アアッ、田手上が足の骨折りよった!?
タテガミ 先生。おれはもうダメだ。

藤山教諭 (なんの脈絡もなくいきなりぼくに) 梶くん。きみや!
きみが走るんや!

田手上 たのんだぞ、梶!

そこへ父が駆けこんでくる。

父 (震えて) コージ。なくなっちゃった。東京タワー舞子さん付
き灰皿が灰になって消えちゃった。おとうさん、パチンコ屋で
おまえ勝手口のゴミ箱まで探したんだ。そしたらよ——

出前の女3 (さらに原稿に手を入れ) チーンジャラジャラ……と
ね。

父 (腹巻きをめくると札束がジャラジャラこぼれ) 百万円拾っち
やった!

そこへ医師と看護婦が沈痛な面持ちでやってくる。

医師 (父に) 梶さん。……

父 せ、先生!?

医師 申し訳ありません。あらゆる手をつくしたのですが、奥さんは――

出前の女3 (調子にのってペンをはしらせ) ケロツと――

医師 全快しました!

母がスキップふみながら登場。トンボまできつてみせる。

父 ヨキコ!?

母 あなた。……コウちゃん。(抱き合う家族)

出前の女3 (原稿の上に書き加えながら) こうして……奇跡は……起こったのです。

デタラメな事の成り行きをなすすべもなく見まもっていた
ヤスベ―、ようやく出前の女3に気づき、机に駆け寄って

ヤスベ― やめろ!

ト、ペンを取りあげる。

ぼくは父と母の手を握り、彼方を見はるかすように立ちつくした。

つるべ落としの秋の空の下で、電信柱の裸電球が急に明るくなつたような気がする。その仄明かりのなかにヤスベ―は影のように立つ。

登場人物たちはスマイレ色のシルエツトになり、一人また一

人と消えてゆく。

ヤスベ― それは、空を飛ぶ黒いものが夢のように思えたり、町はずれの街燈の下にはきつとだれかの影法師が落ちていたりした、そんな日暮れのことでした。

出前の女3 (原稿を手に、読んで) 「ほら、おとうさん。ずっとずっと向こうの地平線。あれは雲かねえ。それとも山かねえ」
ヤスベ― こんな夜こんなふうに分が空をながめているのは、実にはるかに遠い未来の夜であり、しかもそこは星の世界の都会ではなからうか。コウちゃんはそんな気がしてなりませんでした。

出前の女3 「ねえ、おかあさん。百年たったら、宇宙ロケットにのって、みんな火星や土星やどこにでも行って暮らしましょう。おとうさんも、おかあさんも、松島トモコも連れていきましよう」

ヤスベ― 明くる日、コウちゃんのおかあさんは車にはねられ、そして、二、三日目に三十六で亡くなりました。

マンガの壁がぼくたちをのみこむ。
ヤスベ―と出前の女3だけが残された。

出前の女3 これが先生のいう、この地上における正義の勝利と善人の幸せってわけ？

ヤスベ― ぼくにはどうすることもできないんだよ。……って、きみ、さっきのソバ屋さん？

出前の女3 店に寄ってき、ちーっとお化粧してきたのよ。

ヤスベ― きみ、やめた方がいいよ、お化粧。

出前の女3 ほっといてよ。いろんな自分に出逢えて楽しいじやない。

ヤスベ― 自分がたくさんいるんだ？

出前の女3 そおよお。神様の自分に家来の自分にその他いろいろ。やあねえ。先生がそうやって描いたんじゃない。

ヤスベール ぼくは「わかりません」て、描いたんだ。（藤山教諭の口真似で）もう1人のぼくが二人なのか三人なのかもつとたくさんなのか、いまはまだ先生にはわかりません。

出前の女3 （原稿をトントンとそろえ、さしだして）ハイ。先生、これ。（ト、渡して）途中ちよこつと描きなおしといたけど。だって、暗いんだもん、先生のマンガ。

ヤスベール 描きなおしたってきみ……（原稿をめくり、驚いて）田手上くん？

出前の女3 ああ、彼ね。家出させたわ。悟っちゃったのよ。このまま生きてても、結局自分は将来売れないマンガの編集者になるのがおちだってね。

マンガの壁が割れタテガミが登場。彼方を双眼鏡でのぞいている。

出前の女3 彼、天文学者になるんだって。

ヤスベール 天文学者？

出前の女3 だれかが書いてたでしょ。「人生になんの興味もないときにだけ、人は童話の天文学者になります」……でも、たいした学者にやなれなかったわ。彼ね、どうしてもオリオンと北斗七星の区別がつかなかったの。それに、どうしても北斗七星がヒシヤクに見えるってことが理解できなかったの。

タテガミ （彼方に）さよーなら、先生！

ト、マンガのなかに消える。

ヤスベール （彼方に）田手上くん！

出前の女3 それから、コウちゃんのおとうさんね、拾った百万円

でリヤカー一杯灰皿つくって代々木の方向に去っていったわ。

マンガの世界にダンボール箱を山積みしたりリヤカー引いて父が登場した。

父 えー、東京タワー舞子さん付き灰皿だよー。ジャパニーズダンシング・ベイビー！ マイコサンだよー……

出前の女3 おとうさんは二度とコウちゃんのもとにはもどりませんでした。はやい話、人間蒸発ね。

父、リヤカーを一回転。すると荷台にぼくが座っていた。

ぼくはリヤカーをとびおり、去って行く父の後ろ姿を見送っている。

ぼくの目の前でマンガの壁が閉じ、父をのみこむ。

ヤスベー コウちゃんは？

出前の女3 終わりだけはいくらあたしだってどうにもできないわ。

だって先生、このマンガ、終わりから描きはじめたんでしょ？

ヤスベー ………

出前の女3 さあて、そろそろ帰るかな。（ト、上手へ去りながら）

そしてついに、トツキトーカがめぐってまいりました。

ヤスベー 待ってくれよ。

出前の女3 （ふりかえり）西暦一九六四年十月十日。——亢生。
オリンピック始まるわよ。

ト、去る。

そ4の十一 コカコーラ殺人事件

高らかに鳴りわたる東京五輪ファンファーレとともにマンガの壁がゆっくりと割れ、すき間から光の筋がさしこむ。

その逆光のなかを黒い影がぼくに近づいてくる。やがて影は松島の父になる。

そこは松島の父のなんでも靴の店先。

松島の父 やあ、来てくれたんですか。

ぼく ……

松島の父 天気でよかったねえ、オリンピック。

ぼく (ほかに話すことも見つからず) おばさんはいないんですか？

松島の父 あれ？ トモコはなにもいってませんでしたか。

ぼく ……

松島の父 そうですか。あれは正田美智子さんが結婚した年でした。

五年、いや？ 六年前かなあ。この店に強盗がはいりましてね。

殺されたんですよ、家内は。ちょうど(ト、ぼくの左胸をさし

)(ト、刺されちゃってさ。

ぼく ……

松島の父 こんな店、いってくれたら、そこらにあるもん残らず持

ってったって、こっちは黙って見てたのに。黙って見てないで

手伝え、なんていわれたらそりゃ怒っちゃうけどさ。だって、

そんなことしたら汗かいて服が汚れるもんねえ。

松島の父は、自分のことばがおかしくてたまらないふうに

涙を流して笑う。

笑うと悪魔のようになるその顔を、ぼくは肩をすくめて見

つめている。

松島の父 (ようやくぼくの存在に気をもどし) コカコーラ、飲み

ますか。

ぼく はい。

松島の父 持ってきます。(ト、去らんとする)

ぼく 待ってください。(ポケットからコカコーラの空き壺を出し) これ。

松島の父 なんですか？

ぼく 足りない分は、また今度持ってきますから。

松島の父 壺代一本十円か。気イばかしつかつてると立たなくなる

よ。(ト、壺を受け取り)……？(壺のなかをのぞき) ヤモリ
ですね。

ぼく はい。ヤモリです。

松島の父 (壺を振り)……死んでますねえ。なかでデカくなりす

ぎたんですねえ。

ぼく 高度成長なんです。

松島の父 (ヤモリのミイラに口汚く) バカヤローが。こんななか

にいてどうしてデカくなれたんだよオ。そんなにコカコーラが

好きなのか、テメエ、このヤロー。

ぼく あのお……

松島の父 はい。

ぼく コカコーラ、やめました。

松島の父 コカコーラ、飲まないんですか。

ぼく そのかわし、いいでしょうか。

松島の父 なんですか。

ぼく マッチもらえますか。

松島の父 マッチ？ パイプ・マッチでいいですか？

ぼく はい。パイプ・マッチでいいです。

松島の父は去る。

ヤスベー もしぼくがあのとときあの一本のコカコーラを飲んでいさ

えすれば、おそらく、少年野球史上不滅の四番打者が誕生し、

「お座敷小唄」で始まる生徒総会は学校の名物行事になり、日

本コカコーラーボトリングは空き缶回収のための予算削減に成功し、そして、蛸山写真館の主人は卒業写真の松島トモコの黒枠の隣に、もうひとつの黒枠をはめこむ手間から解放されたはずなのです。もしぼくがあのとときあの1本のコカコーラを飲んでいさえすれば……

松島の父。パイプ・マッチを持ってもどつてくる。

松島の父 はい。パイプ・マッチ。

ぼく ありがとう。

松島の父 マッチなんかどうするんです？

ぼく ロケットをつくるんです。

松島の父 ロケットですか。

ぼく はい。ロケットです！

クイック・マーチがながれる。厭世的な。

ぼくは音楽にのり彼方へ向けて足踏みをはじめ。

ぼくの背後から複数のぼくが列をなして行進してくる。も

ちろん、もう一人のぼくも一緒だ。

松島の父 (ぼくの背中に) おーい！ ジャブジャブ池には近づく

なよ！

ヤスベー そうです。たしかに松島のおとうさんはそう叫んだのです。「いいか。ジャブジャブ池だぞ！」もしぼくがあのとときあのことをきいていなければ、ぼくの計画は勉強机の上の空想で終わっていたでしょう。松島が溺れて以来、ジャブジャブ池は立入禁止になりました。子供だけでなく、もちろん大人もです。だから、絶対ジャブジャブ池なら！

松島の父 いいか。ジャブジャブ池だぞ！

松島の父、行進の陰に消え去る。

ぼくともう1人のぼくと複数のぼくたちは肩を並べ大地を踏みしめて行進する。

ぼく 梶くん。

もう1人のぼく なアに、梶くん。

ぼく ジャブジャブ池、行きませんか。

もう1人のぼく 行ってもいいですよ。

ぼく マッチがあるんだ。

もう1人のぼく パイプ・マッチですか。

ぼく 家に行けばペンシルキヤップもあるし。それから、セルロイドの下敷きもあるぜ。

もう1人のぼく セルロイドの下敷きを細かく切りますかあ？

ぼく ペンシルキヤップにマッチの火薬と一緒に詰めますよお。

もう1人のぼく 宇宙ロケットのできあがりですねえ？

ぼく ジャブジャブ池は宇宙ロケット日和ですよお。

もう1人のぼく 宇宙ロケット、発射しますかあ？

ぼく 宇宙ロケット、発射しますよお。

ぼくたち 宇宙ロケット、発射しますよおッ！

行進が終わり、ぼくたちはロケットの発射準備にとりかか
る。(プロローグの反復だ)

ヤスベー 西暦一九六四年十月十日。ヴォストークにのったガガー
リンが宇宙旅行から戻って三年。だのに、そのころぼくたちは
といえば、まるでペンシルキヤップのように貧弱なロケットの
発射実験に何度も何度も失敗していました。はじめから負ける
とわかっているならやめちまえばいいのに。西暦一九六四年十
月十日。国鉄スワローズが優勝を逃した最後の年。その翌年、
国鉄スワローズはサンケイスワローズと名前をかえました。タ

ケジーがムサシへと名前をかえ、そして、国鉄は新幹線の家来になったのです。ジェット機のようにはやい未来の列車新幹線は、コウちゃんのおとうさんの東京タワー舞子さん付き灰皿のように、国鉄の貯金をつかいはたしてしまいました。でも、そんなことはどうでもいいのです。宿命の白い煙をはいて突き進むコウちゃんの宇宙ロケットの軌跡を、ぼくは見届けなくてはならないんだ！ぼくたちは発射準備を完了し、カウントダウンを始めていた。

ぼくたち ……5、4、3、2、1、発射！

轟音と煙を吐いて、ロケットはストロボの明滅するなか、あてどなく舞台をさまよい、そして、ついに自らの終局の目標を発見、すなわち、もう1人のぼくの顔面めがけて――
――一瞬の暗転。

ぼくの声 （闇のなかで）イヤだーッ！

明かりがもどると、目から血を流してうずくまるもう1人のぼくと、その傍らに立ちつくすぼくだけが残された。

もう1人のぼく 梶くん。宇宙ロケット、命中ですよ。

ぼく ウン。命中ですね。

もう1人のぼく ダメかなあ。全然痛くないんだ。ぼく、もうダメかなあ。

ぼく そんなbとないですよ。

もう1人のぼく 痛くないのは死んじゃうからかなあ。チキショー。痛くならないかなあ。

ぼく ぼく、マツチじゃなく、コカコーラもらえばよかったですねえ。

もう1人のぼく もういいよ。コカコーラにはずいぶんお世話にな

ったし。

ぼく おたく、転校してこなきやよかったですねえ。永遠の遠国に
いれば、よかったですねえ。

もう1人のぼく 永遠で、どのくらい？ アメリカよりも遠い？

ぼく そうですねえ。

もう1人のぼく ディズニーランド行きたかったなあ。

ぼく おたく、死んだら、あの夢もう見なくていいですねえ。

もう1人のぼく ぼく、おたくのこと、もう見えないのかなあ。：

：

ぼくは泣きながらポケットから包帯を出し、自分の顔にグ
ルグル巻きはじめる。

もう1人のぼく 梶くん。なにしてるの？

ぼく 見えますよ。こうすれば、ぼくのこと、きっと見えますよ。

……だって、ぼく、透明人間やねん。今日からぼく、ホンモノ
の透明人間やねんッ！

追憶がゆっくりと幕をおろす。(紗幕)

幕の向こうに複数のぼくたちの影が浮かぶ。薔薇色の西空
の下、永遠的な感覚を移植され、立ちつくし、石をけり、
しゃがみこみ、ぼくたちは影絵のように動かない。

ヤスベー われ思う、夢にわれあり。夢の町で出逢ったからと、今
日も白くふるえる街灯の下であの子はぼくを待つのでしょうか。
だれかの夢に見られたぼくと、そのぼくの夢に見られたもうひ
とりのぼくと、ぼくと、ぼくたちの物語は、これで終わりです。

ぼくたちは闇に呑みこまれる。

ヤスベーの仕事部屋。

除夜の鐘がまぎれこむ。

ヤスベー (いま一度、最後の点検をするかのように原稿をめくり、なかの一枚を読んで) ぼくはいまでも、ニジツセイキの悲しみが交錯したような青い都会の夕べ、街角のプラタナスの下でふるえている白い電灯を見ると、なぜかコウちゃんが泣いているように思われてならないのです。……(顔を上げ)ふるえるところはなんでしよう。人間のふるえるところはなんでしよう。ぼくのこころはコウちゃん、いま太陽系の第四惑星、火星の無人の平原を漂うばかりです。そして頭上の、ぼくと、ぼくと、ぼくたちの最後の淋しい星に、さよなら、ニジツセイキ。火星から愛をこめて。

ヤスベー、歌う。

♪

むせび泣く ヴィヨロンにJ

胸の想い 託しましよ

凍てつく窓辺に 寄り添う影

窓にかかる フルムーン

見上げて今宵も 夢と夢

あなたに from MARS with LOVE

見果てぬ夢の from MARS with LOVE

心乱れる クラリネットに

過ぎた日々を 想いましよ

ビルの谷間を 走り去る影

残していった コズミック・ミステリー

めぐって今宵も 夢と夢

あなたに from MARS with LOVE

見果てぬ夢の from MARS with LOVE

歌い終わる。

ヤスベール、仕事机の上の原稿の束を取り上げ、ライターに着火、原稿を燃やそうとする。

下手から現れた人影がヤスベールにとびかかる。

それはぼくによく似たもうひとりのヤスベール、すなわちヤスベール2だ。

ヤスベール2 なにをするんだ!?

ヤスベール きみは? (ト、原稿を奪いかえす)

ヤスベール2 きみは? ……さっきのソバ屋さん!?

ヤスベール え?

下手から藤山教諭によく似たもう一人の田手上、田手上2が登場。

ヤスベール2 ずいぶんながいトイレだったね、田手上くん。

ヤスベール 田手上くん?

田手上2 イヤー、ウンコの切れが悪くって……あれ!? 来てるじ

やない、ソバ。先生先生、食いましょう、ソバ。(ヤスベールを

見て) 先生、お友達ですか?

ヤスベール2 だから、ホラ、ソバ屋さんだよ。

ヤスベール、コートを脱いでみる。ト、ほんとにソバ屋さんだった。

田手上2 なアんだ、ソバ屋さんか。

ヤスベール 毎度どうも……

田手上2 よかったら一緒に一杯やらない? 今夜は特別な夜だから

らさ。一人でも仲間が多い方がいいや。ねえ、先生。

ヤスベール2 そうだよ。こんな夜に仕事してると夢に食われちゃう

よ。(ト、いいながら、自分は机で仕事を始める)

田手上 さ、さ、こんなニジツセイキの遺物みたいな服、脱いで脱いで。(ト、ヤスベー。のソバ屋の白衣を脱がせる)

ヤスベー ありがとう。

田手上 2 酒ありましたよね、先生。

ト、下手に去る。

間。

再び除夜の鐘が遠くに。

ヤスベー 2 静かな夜だねえ……

ヤスベー ねい、先生。――

ヤスベー 2 (筆をつかいながら) ごめんね。この最後のページ、ベタ塗りしたら終わるから。

ヤスベー 先生はマンガ……好きですか？

ヤスベー 2 (顔は上げずに) どうして？

ヤスベー ぼくね、マンガは堕ちるとこまで堕ちればいいと思ってる。マンガなんか読む人が一人もいなくなればいいと思ってる。そうならないかぎりマンガは……

ヤスベー 2 マンガは？

ヤスベー ぼくも先生みたいにコココーラが出てくるマンガ描いてるんですよ。……(ヤスベー 2の背後に影のように立ち) ぼく、

三人も殺しちゃった。

ヤスベー 2 (仕事に集中して) ……

ヤスベー 一人目は事故、二人目は病気に見せかけ……三人目はペンシルキヤップのロケットで。

ヤスベー 2 (手をとめ、ヤスベーをふりむき) ぼくのマンガと同じだ!?

ヤスベー そして、四人目は……

ヤスベー 2 四人目？

ヤスベール、いきなり背後からヤスベール2の首を絞める。

ヤスベール2 なにをするんだ……

ヤスベール こうするしかないんだよ！

ますます手に力をこめるヤスベール。必死で抵抗するヤスベール2。

そこへやさしいおじさんが画帖を小脇に登場する。それも一人や二人ではない。舞台のあちらこちらから六人も登場したのだ。

やさしいおじさんたち はなすんだ、ヤスベール。

ト、ヤスベールにとびかかり、ひきはなす。ヤスベールはグツグツと机につつぶす。

ヤスベールは泣きながら、やさしいおじさん1の胸にとびこむ。

ヤスベール おじさんッ！

やさしいおじさん1 さあ、アゴをあげるんだ、ヤスベール。（目深

な帽子の下の顔は田手上だった）

ヤスベール ……!?

やさしいおじさん2 大丈夫。（ト、いうのは母だった）

やさしいおじさん3 大丈夫だよ、ヤスベール。（ト、いうのは父だった）

ヤスベールは、やさしいおじさんたちの顔を一人一人たしかめるように見まわす。

やさしいおじさん4 ねい、ヤスベール。（ト、いうのは松島だった）

やさしいおじさん5 勇気があるかい？ (ト、いうのは松島の父
だった)

やさしいおじさん6 ついてくるね。(ト、いうのは医師だった)

ヤスベ― (うなずいて) ……

やさしいおじさんたち (呪文を) アノクタラ・サントシル・ソワ

カ!

ヤスベ― 我ハ汝ヲ、愛ス者ナリ……。

やさしいおじさんに肩を抱かれ、ヤスベ―は幕の彼方の闇
へ溶けるように消える。

下手の机につつぶして死んだように動かないヤスベ―2だ
けが舞台に残る。

田手上2、一升瓶を持ってもどってくる。

田手上2 先生? ……風邪ひきますよ、居眠りなんかして。(肩
をゆすり) 先生。

ヤスベ―2 ウーン……(ト、伸びをし) アー、よく寝た。(あた
りを見まわし) あれ? ソバ屋さんは?

田手上2 ソバならとつくに来てますよ。

ヤスベ―2 (探しながら舞台中央へ) だつてきみ、一緒に1杯や
ろうっていつてたじやないか……

田手上2 なんの話です?

ヤスベ―2 ……

しつこく除夜の鐘がきこえる。

二人は彼方をながめやる。

田手上2 先生。ホラ、地球があんなに……

ヤスベ―2 ニジツセイキもこれでおしまいなあ。

ヤスベール2の足元で小さな金属音がして銀色に光るなにかが床をころがる。

ヤスベール2 (銀色の物体を拾いあげ) ペンシルキャップ!? ……

一体どうしてぼくはこんなもので人が殺せると思ったんだろう?

紗幕の後ろに巨大なマンガ本が浮かんだ。

その前に立つやさしいおじさんは、ヤスベールだ。

ヤスベールはヤスベール2に名残りを惜しむように手をふる。

ヤスベール2は、笑う。ニジツセイキを笑いとばすかのよう
に。

田手上2 なにがおかしいんです先生?

ヤスベール2 (彼方の空へ) 宇宙ロケット、発射しますよおツ!

ヤスベールの背後で轟音と煙とともにマンガ本が開く。

マンガのなかから登場人物たちがとびだし、ヤスベールを囲む。

見上げる空には、影絵の町の屋根から発射された宇宙ロケットが、

青く光る最後の淋しい星へ向けとんでゆく。

f

ロケットにまたがった人影。それはきつと無数のぼくたちにちがいない。

幕